



でのマイクロフロントエンドの理解と実装 AWS

AWS 規範ガイドンス



AWS 規範ガイド: でのマイクロフロントエンドの理解と実装 AWS

Copyright © 2024 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは、Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は、Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

序章	1
概要	1
基本的な概念	6
ドメイン駆動型設計	6
分散システム	8
クラウドコンピューティング	8
代替アーキテクチャ	10
モノリス	10
N 層アプリケーション	10
マイクロサービス	11
要件に対するアプローチの選択	11
アーキテクチャ上の意思決定	12
マイクロフロントエンドの境界	12
モノリシックアプリケーションをマイクロフロントエンドにスライスする方法	13
マイクロフロントエンドコンポジションアプローチ	15
クライアントサイドコンポジション	15
エッジサイドコンポジション	17
サーバーサイドコンポジション	17
ルーティングと通信	19
ルーティング	19
マイクロフロントエンド間の通信	19
マイクロフロントエンドの依存関係を管理する	20
可能な場合は何も共有しない	20
コードを共有する場合	21
共有状態	21
フレームワークとツール	23
フレームワークに関する一般的な考慮事項	23
API 統合 – BFF	25
スタイリングと CSS	27
システムを設計する – 何かを共有するアプローチ	27
完全にカプセル化された CSS – 何も共有しないアプローチ	28
共有グローバル CSS – 共有オールアプローチ	29
組織	31
アジャイル開発	31

チームの構成と規模	32
DevOps 文化	32
複数のチームにわたるマイクロフロントエンド開発のオーケストレーション	34
デプロイ	35
ガバナンス	36
API 契約	36
相互対話	37
自律性と調整のバランスをとる	38
マイクロフロントエンドの作成	38
マイクロフロントエンドの E nd-to-end テスト	38
マイクロフロントエンドのリリース	39
ログ記録とモニタリング	39
アラート	39
機能フラグ	41
サービス検出	42
バンドルの分割	43
Canary リリース	43
プラットフォームチーム	45
次のステップ	46
リソース	50
寄稿者	51
ドキュメント履歴	52
用語集	53
#	53
A	54
B	56
C	58
D	61
E	65
F	67
G	69
H	69
I	71
L	73
M	74
O	78

P	81
Q	83
R	84
S	86
T	90
U	91
V	92
W	92
Z	93
.....	XCV

でのマイクロフロントエンドの理解と実装 AWS

Amazon Web Services ([寄稿者](#))

2024 年 7 月 ([ドキュメント履歴](#))

組織が俊敏性とスケーラビリティを求めるにつれて、従来のモノリシックアーキテクチャがボトルネックになり、迅速な開発とデプロイが妨げられることがよくあります。マイクロフロントエンドは、複雑なユーザーインターフェイスを、自律的に開発、テスト、デプロイできるより小さな独立したコンポーネントに分割することで、これを軽減します。このアプローチにより、開発チームの効率が向上し、バックエンドとフロントエンド間のコラボレーションが容易になり、分散システムの end-to-end 連携が促進されます。

この規範的なガイドは、さまざまなプロフェッショナルドメインの IT リーダー、製品所有者、アーキテクトがマイクロフロントエンドアーキテクチャを理解し、アマゾン ウェブ サービス () でマイクロフロントエンドアプリケーションを構築できるように調整されていますAWS。

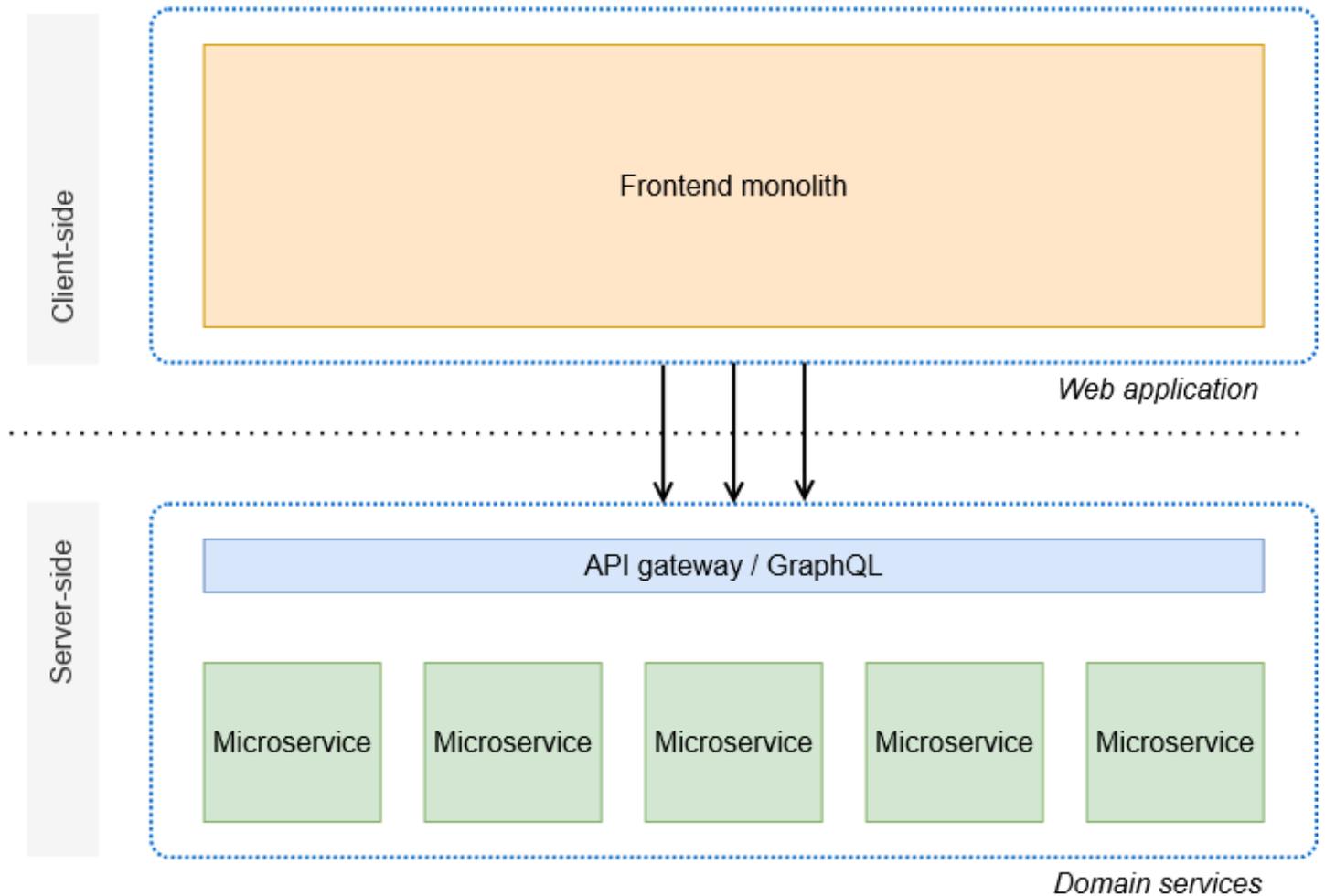
概要

マイクロフロントエンドは、アプリケーションフロントエンドを独自に開発およびデプロイされたアーティファクトに分解することに基づいて構築されたアーキテクチャです。大きなフロントエンドを自律型ソフトウェアアーティファクトに分割すると、ビジネスロジックをカプセル化し、依存関係を減らすことができます。これにより、製品増分をより迅速かつ頻繁に配信できます。

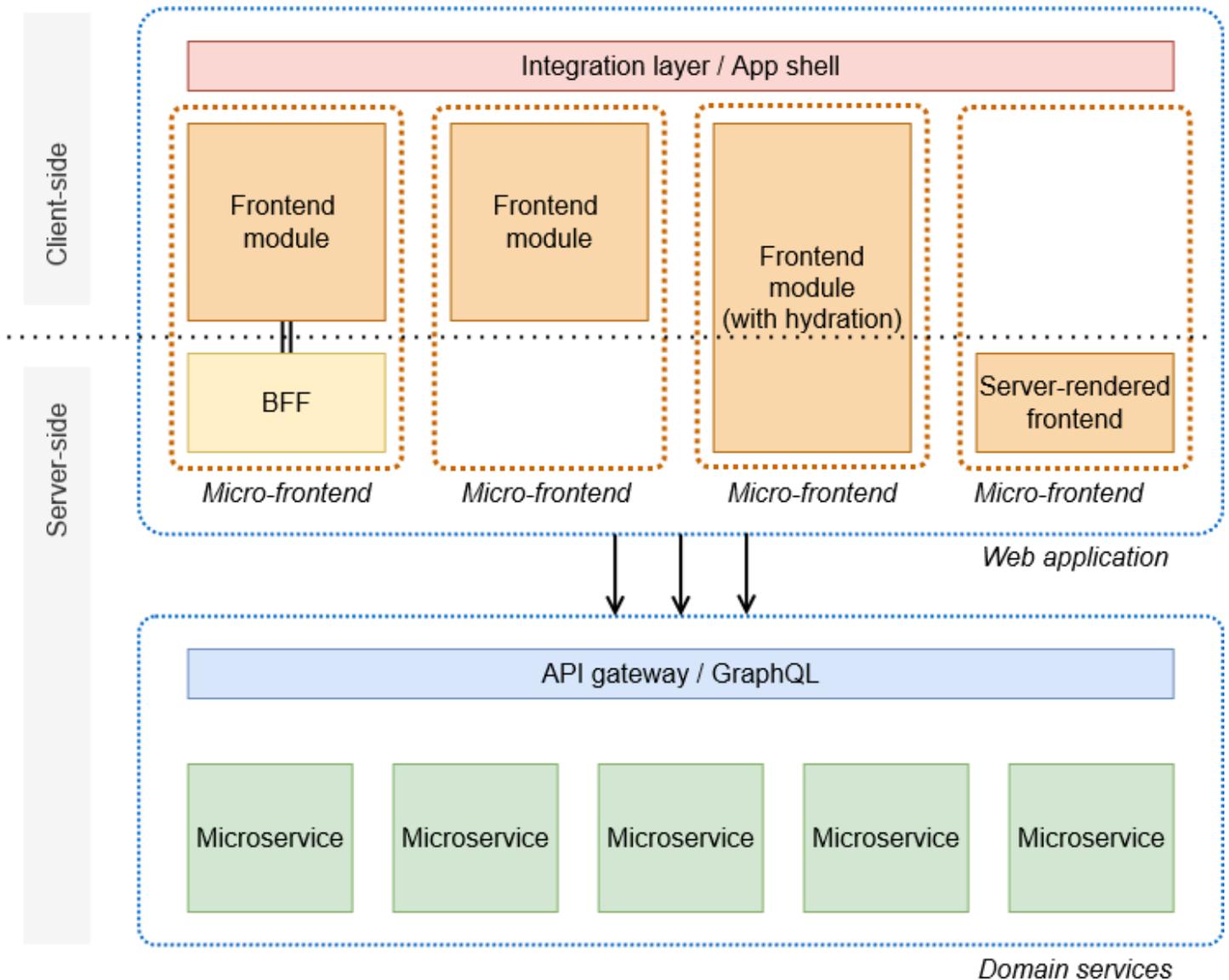
マイクロフロントエンドはマイクロサービス に似ています。実際、マイクロフロントエンドという用語はマイクロサービスという用語から導き出され、マイクロサービスの概念をフロントエンドとして伝えることを目的としています。マイクロサービスアーキテクチャは通常、バックエンドの分散システムとモノリシックフロントエンドを組み合わせていますが、マイクロフロントエンドは自己完結型の分散フロントエンドサービスです。これらのサービスは、次の 2 つの方法で設定できます。

- フロントエンドのみ、マイクロサービスアーキテクチャを実行する共有 API レイヤーと統合
- フルスタック、つまり各マイクロフロントエンドには独自のバックエンド実装があります。

次の図は、API ゲートウェイを使用してバックエンドマイクロサービスに接続するフロントエンドモノリスを備えた、従来のマイクロサービスアーキテクチャを示しています。



次の図は、マイクロサービスの実装が異なるマイクロフロントエンドアーキテクチャを示しています。



前の図に示すように、クライアント側のレンダリングアーキテクチャまたはサーバー側のレンダリングアーキテクチャでマイクロフロントエンドを使用できます。

- クライアント側でレンダリングされたマイクロフロントエンドは、一元化された APIs によって公開された API を直接使用できます。
- チームは、境界コンテキスト内に backend-for-frontend (BFF) を作成して、APIs に対するフロントエンドの混雑を軽減できます。
- サーバー側では、ハイドレーションと呼ばれる手法を使用して、サーバー側のアプローチをクライアント側で拡張することで、マイクロフロントエンドを表現できます。ブラウザによってページがレンダリングされると、関連付けられた JavaScript がハイドレートされ、ボタンのクリックなどの UI 要素とのやり取りが可能になります。

- マイクロフロントエンドはバックエンドでレンダリングでき、ハイパーリンクを使用してウェブサイトの新しい部分にルーティングできます。

マイクロフロントエンドは、次のことを行う組織に最適です。

- 同じプロジェクトに取り組んでいる複数のチームでスケールリングします。
- 意思決定の分散を受け入れ、デベロッパーが特定されたシステムの境界内でイノベーションできるようにします。

このアプローチにより、チームの認識負荷が大幅に軽減されます。これは、チームがシステムの特定の部分を担当するためです。システムの一部を変更しても、残りを中断することなく変更できるため、ビジネスの俊敏性が向上します。

マイクロフロントエンドは、明確なアーキテクチャアプローチです。マイクロフロントエンドを構築するにはさまざまな方法がありますが、それらにはすべて共通の特性があります。

- マイクロフロントエンドアーキテクチャは、複数の独立した要素で構成されています。この構造は、バックエンドのマイクロサービスで発生するモジュール化に似ています。
- マイクロフロントエンドは、以下で構成される境界コンテキスト内のフロントエンド実装に完全に責任を負います。
 - [ユーザーインターフェイス]
 - [データ]
 - 状態またはセッション
 - ビジネスロジック
 - フロー

境界コンテキストは、入出力を仲介する慎重に設計された境界を持つ内部整合性のあるシステムです。マイクロフロントエンドは、ビジネスロジックやデータを他のマイクロフロントエンドとできるだけ少なく共有する必要があります。共有が必要な場所では、カスタムイベントやリアクティブストリームなどの明確に定義されたインターフェイスを介して行われます。ただし、設計システムやログ記録ライブラリなど、カット間の懸念がある場合は、意図的に共有することをお勧めします。

推奨されるパターンは、部門横断的なチームを使用してマイクロフロントエンドを構築することです。つまり、各マイクロフロントエンドは、バックエンドからフロントエンドまで作業する同じチームによって開発されます。コーディングから本番環境でのシステムの運用化まで、チームの所有権は重要です。

このガイドは、特定のアプローチを推奨するものではありません。代わりに、さまざまなパターン、ベストプラクティス、トレードオフ、アーキテクチャと組織の考慮事項について説明します。

基本的な概念

マイクロフロントエンドアーキテクチャは、3つの以前のアーキテクチャ概念から大きく影響を受けています。

- ドメイン駆動型設計は、複雑なアプリケーションを一貫したドメインに構造化するためのメンタルモデルです。
- 分散システムは、独自に開発され、独自の専用インフラストラクチャで実行される疎結合サブシステムとしてアプリケーションを構築するためのアプローチです。
- クラウドコンピューティングは、IT インフラストラクチャを pay-as-you-go モデルでサービスとして実行するためのアプローチです。

ドメイン駆動型設計

ドメイン駆動型設計 (DDD) は、Eric Evans によって開発されたパラダイムです。2003 年の本「[Domain-Driven Design: Tackling Complexity in the Heart of Software](#)」では、Evans はソフトウェア開発は技術的な問題ではなくビジネス上の懸念によって推進されるべきだと想定しています。Evans は、IT プロジェクトが最初に、技術専門家とドメイン専門家が共通の理解を見つけるのに役立つユビキタスな言語を開発することを提案します。その言語に基づいて、ビジネス上の現実について相互に理解されたモデルを策定できます。

そのアプローチは明らかですが、多くのソフトウェアプロジェクトはビジネスと IT の切断に悩まされています。これらの切断は、多くの場合、大きな誤解を引き起こし、予算の超過、品質の低下、またはプロジェクトの失敗につながります。

Evans では、他の複数の重要な用語が導入されています。そのうちの 1 つが境界コンテキストです。境界付きコンテキストは、1 つのビジネス上の懸念に対するソリューションまたは実装を含む大規模な IT アプリケーションの自己完結型セグメントです。大規模なアプリケーションは、統合パターンを介して疎結合された複数の境界コンテキストで構成されます。これらの境界コンテキストは、ユビキタス言語の独自の方言を持つこともできます。例えば、アプリケーションの支払いコンテキストのユーザーは、配送の概念が支払い中に無関係になるため、配送コンテキストのユーザーとは異なる側面を持つ場合があります。

Evans は、境界コンテキストの規模を定義しません。サイズはソフトウェアプロジェクトによって決定され、時間の経過とともに進化する可能性があります。コンテキストの境界を示す優れた指標は、エンティティ (ドメインオブジェクト) とビジネスロジックの間の結合度です。

マイクロフロントエンドのコンテキストでは、フライト予約ページなどの複雑なウェブページの例でドメイン駆動型設計を説明できます。

The screenshot shows a web browser window with the URL `https://www.example.com/flight-search`. The search form contains the following fields and buttons:

- Origin: DUS, CGN
- Destination: TFA
- Passengers: 2 adults, 3 children
- Departure Date: 23/09/2023
- Return Date: 05/10/2023
- Search Button: SEARCH FLIGHTS

The results section, titled "RESULTS", displays four identical flight options. Each option consists of a table with the following data:

✈️	DUS 10:16	✈️	TFS 13:21	498,00 €	BUY
	TFS 14:33		DUS 17:57		

このページでは、主な構成要素は検索フォーム、フィルターパネル、結果リストです。境界を特定するには、独立した機能コンテキストを特定する必要があります。さらに、再利用性、パフォーマンス、セキュリティなどの非機能的な側面も考慮してください。「一緒に属するモノ」という最も重要な指標は、コミュニケーションパターンです。アーキテクチャの一部の要素が頻繁に通信し、複雑な情報を交換する必要がある場合、同じ境界コンテキストを共有する可能性があります。

ボタンなどの個々の UI 要素は機能的に独立していないため、境界コンテキストにはなりません。また、ページ全体は、より小さな独立したコンテキストに分割できるため、境界コンテキストには適していません。妥当な方法は、検索フォームを 1 つの境界コンテキストとして扱い、結果リストを 2 番目の境界コンテキストとして扱うことです。これら 2 つの境界コンテキストをそれぞれ個別のマイクロフロントエンドとして実装できるようになりました。

分散システム

メンテナンスを容易にし、進化する機能をサポートするために、単純な IT ソリューションの大部分はモジュール式です。この場合、モジュール式とは、IT システムが識別可能な構成要素で構成され、インターフェイスを介して分離され、懸念を分離することを意味します。

分散システムは、モジュール型であることに加えて、独自の独立したシステムである必要があります。単にモジュラーシステムの場合、各モジュールは理想的にはカプセル化され、インターフェイスを介してその関数を公開しますが、個別にデプロイしたり、単独で機能させたりすることはできません。また、モジュールは通常、同じシステムの一部である他のモジュールと同じライフサイクルに従います。一方、分散システムの構成要素には、それぞれ独自のライフサイクルがあります。ドメイン駆動型設計パラダイムを適用すると、各構成要素は 1 つのビジネスドメインまたはサブドメインに対処し、独自の境界コンテキストに属します。

構築中に分散システムが相互作用する場合、一般的なアプローチは、問題をすばやく特定するためのメカニズムを開発することです。例えば、型付き言語を採用して、ユニットテストに多額の投資を行う場合があります。複数のチームがモジュールの開発とメンテナンスに共同作業できます。多くの場合、npm、Apache Maven、NuGetpip などのツールでシステムを消費するためのライブラリとして配布されます。

実行時には、対話型の分散システムは通常、個々のチームによって所有されます。依存関係を消費すると、エラー処理、パフォーマンスバランシング、セキュリティのために運用が複雑になります。統合テストとオブザーバビリティの成果は、リスクを軽減するために不可欠です。

今日の分散システムの最も一般的な例はマイクロサービスです。マイクロサービスアーキテクチャでは、バックエンドサービスは (UI や認証などの技術的な懸念によって駆動されるのではなく) ドメイン駆動型であり、自律型チームによって所有されます。マイクロフロントエンドは同じ原則を共有し、ソリューションの範囲をフロントエンドに拡張します。

クラウドコンピューティング

クラウドコンピューティングは、独自のデータセンターを構築し、オンプレミスで運用するためのハードウェアを購入するのではなく、pay-as-you-go モデルを使用して IT インフラストラクチャをサービスとして購入する方法です。クラウドコンピューティングにはいくつかの利点があります。

- 組織は、大規模で長期的な財務上のコミットメントを事前に行うことなく、新しいテクノロジーを試すことができるため、ビジネスの俊敏性が大幅に向上します。
- などのクラウドプロバイダーを使用することで AWS、組織はメンテナンスが少なく、高度に統合されたサービス (API ゲートウェイ、データベース、コンテナオーケストレーション、クラウド機

能など)の幅広いポートフォリオにアクセスできます。これらのサービスにアクセスすると、組織は競合と区別される作業に集中できるようになります。

- 組織がソリューションをグローバルに展開する準備ができたなら、ソリューションを世界中のクラウドインフラストラクチャにデプロイできます。

クラウドコンピューティングは、高度に管理されたインフラストラクチャを提供することで、マイクロフロントエンドをサポートします。これにより、部門横断的なチームが end-to-end 所有権を簡単に取得できます。チームは運用に関する強力な知識を持っている必要がありますが、インフラストラクチャのプロビジョニング、オペレーティングシステムの更新、ネットワークなどの手動タスクは面倒な作業になります。

マイクロフロントエンドは制限されたコンテキストで動作するため、チームはそれらを実行するのに最適なサービスを選択できます。例えば、チームはコンピューティング用にクラウド関数とコンテナから選択でき、さまざまな種類の SQL データベースと NoSQL データベース、またはインメモリキャッシュを選択できます。チームは、サーバーレスインフラストラクチャ用に事前設定された構成要素が付属している [AWS Amplify](#) などの高度に統合されたツールキットでマイクロフロントエンドを構築することもできます。

マイクロフロントエンドと代替アーキテクチャの比較

すべてのアーキテクチャ戦略と同様に、マイクロフロントエンドを採用する決定は、組織の原則に基づく評価基準に基づいている必要があります。マイクロフロントエンドには利点と欠点があります。組織がマイクロフロントエンドを使用することを決定した場合は、分散システムの課題に対処するための戦略を設定する必要があります。

アプリケーションアーキテクチャを選択する場合、マイクロフロントエンドの最も一般的な代替手段は、モノリス、n 層アプリケーション、マイクロサービスとシングルページアプリケーション (SPA) フロントエンドの組み合わせです。これらはすべて有効なアプローチであり、それぞれに利点と欠点があります。

モノリス

頻繁な変更を必要としない小さなアプリケーションは、モノリスとして非常に迅速に配信できます。大幅な成長が予想される状況でも、モノリスは自然な最初のステップです。後で、モノリスを廃止するか、より柔軟な構造にリファクタリングすることができます。モノリスから始めることで、組織は市場に進出し、顧客のフィードバックを得て、製品を迅速に改善できます。

ただし、モノリシックアプリケーションは、慎重に保守されていない場合や、コードベースのサイズが時間の経過とともに大きくなると、低下する傾向があります。複数のチームが同じコードベースに多大な貢献をしている場合、それらすべてがメンテナンスと運用に寄与することはほとんどありません。これにより、責任のバランスが崩れ、速度に影響し、非効率になります。同時に、モノリスのモジュール間で誤って結合すると、コードベースが進化するにつれて意図しない副作用が発生します。これらの副作用により、誤動作や機能停止が発生する可能性があります。

N 層アプリケーション

比較的静的な進化速度を持つより複雑なアプリケーションは、フロントエンドとバックエンドの間に REST または GraphQL レイヤーを持つ 3 層アーキテクチャ (表現、アプリケーション、データ) として構築できます。これははるかに柔軟で、異なる階層のチームはある程度独立して開発できます。n 層アプリケーションの欠点は、機能のデプロイがはるかに難しいことです。フロントエンドとバックエンドは API 契約によって分離されるため、重大な変更を一緒にデプロイするか、API をバージョンアップする必要があります。

次の一般的なシナリオを考えてみましょう。新機能をリリースする際にデータスキーマの変更が必要な場合、製品所有者がフロントエンドチームと一連の機能について合意するまでに数日かかること

があります。次に、フロントエンドチームはバックエンドチームに、各自の側で機能を開発およびリリースするよう依頼します。バックエンドチームはデータ所有者と協力してデータベーススキーマの更新をリリースします。次に、バックエンドチームは API の新しいバージョンをリリースし、フロントエンドチームが変更を開発してリリースできるようにします。このシナリオでは、変更の開発、テスト、リリースに関する独自のバックログ、優先順位、メカニズムが各チームにあるため、本番環境へのすべての変更の伝播に数週間または数か月かかる場合があります。

マイクロサービス

マイクロサービスアーキテクチャでは、バックエンドは小さなサービスに分解され、それぞれが境界のあるコンテキスト内で特定のビジネス上の懸念に対処します。また、明確に定義されたインターフェイス契約を公開することで、各マイクロサービスが他のサービスと強く切り離されます。

境界コンテキストとインターフェイス契約は、適切に作成されたモノリスと n 層アーキテクチャにも存在する必要があることに注意する必要があります。ただし、マイクロサービスアーキテクチャでは、通信はネットワーク、通常は HTTP プロトコルを介して行われ、サービスには専用のランタイムインフラストラクチャがあります。これにより、各バックエンドサービスの開発、配信、運用が個別にサポートされます。

要件に対するアプローチの選択

モノリスと n 層アーキテクチャは、複数のドメインの懸念を 1 つの技術アーティファクトにバンドルします。これにより、依存関係や内部データフローなどの側面を管理しやすくなりますが、新しい機能の提供はより困難になります。一貫したコードベースを維持するために、チームは処理する必要のあるコードベースが大きいため、リファクタリングとデカップリングに時間を費やすことがよくあります。

いくつかのチームによって開発されたアプリケーションでは、マイクロフロントエンドへの移行に伴う追加の複雑さが不要な場合があります。これは、チームが高い結合とリリース変更への長いリードタイムのペナルティを支払っていない場合に特に当てはまります。

つまり、複雑で動きの速いアプリケーションには、多くの場合、より複雑で分散型のアーキテクチャが適切な選択です。小規模から中規模のアプリケーションでは、特にアプリケーションが短期間で劇的に進化しない場合、分散アーキテクチャがモノリシックアーキテクチャよりも必ずしも優れているとは限りません。

マイクロフロントエンドにおけるアーキテクチャ上の決定

アプリケーションにマイクロフロントエンドアーキテクチャパターンを適用するチームは、アーキテクチャについていくつかの決定を早期に行う必要があります。

- [マイクロフロントエンドの識別と境界の定義](#)
- [マイクロフロントエンドを使用したページとビューの作成](#)
- [マイクロフロントエンド間のルーティング、状態管理、および通信](#)
- [クロスカットの懸念に対する依存関係の管理](#)

以下のセクションでは、これらのトピックについて詳しく説明します。

アーキテクチャを決定するときは、正しいメトリクスを持ち、使用パターンのアプリケーションの特性とトレードオフを理解することが重要です。例えば、e コマースサイトには、動画編集ツールやオペレータビリティダッシュボードとは異なる特性と使用パターンがあります。

トラフィックが多く、セッションの深さが短い公開アプリケーションは、Time to Interactive (TTI) や First Contentful PAint (FCP) などの初期ページロードメトリクスに最適化できます。対照的に、ユーザーが1日の開始時にログインし、1日を通してとやり取りし続けるアプリケーションは、アプリケーション内エクスペリエンスに最適化される可能性があります。アプリケーションチームは、最初のページロードではなく、各ナビゲーションの後に最初の入力遅延 (FID) メトリクスを最適化する場合があります。

パブリックウェブサイトは、さまざまなブラウザ環境に対応している必要があります。クライアント環境に既知の制約があるエンタープライズアプリケーションは、その制約に従ってマイクロフロントエンド構成を最適化できます。

アーキテクチャの決定に適切な選択肢は1つもありません。トレードオフ、ビジネス運営のコンテキスト、使用パターン、メトリクスを理解し、個々のアプリケーションに適した意思決定を導き出します。

マイクロフロントエンド境界の識別

チームの自律性を向上させるために、アプリケーションが提供するビジネス機能は、相互への依存を最小限に抑えながら、複数のマイクロフロントエンドに分解できます。

前述の DDD 方法論に従って、チームはアプリケーションドメインをビジネスサブドメインと境界コンテキストに分割できます。その後、自律チームは境界コンテキストの機能を所有し、それらのコン

テキストをマイクロフロントエンドとして配信できます。懸念事項の分離の詳細については、「[サーバーレスランド](#)」を参照してください。

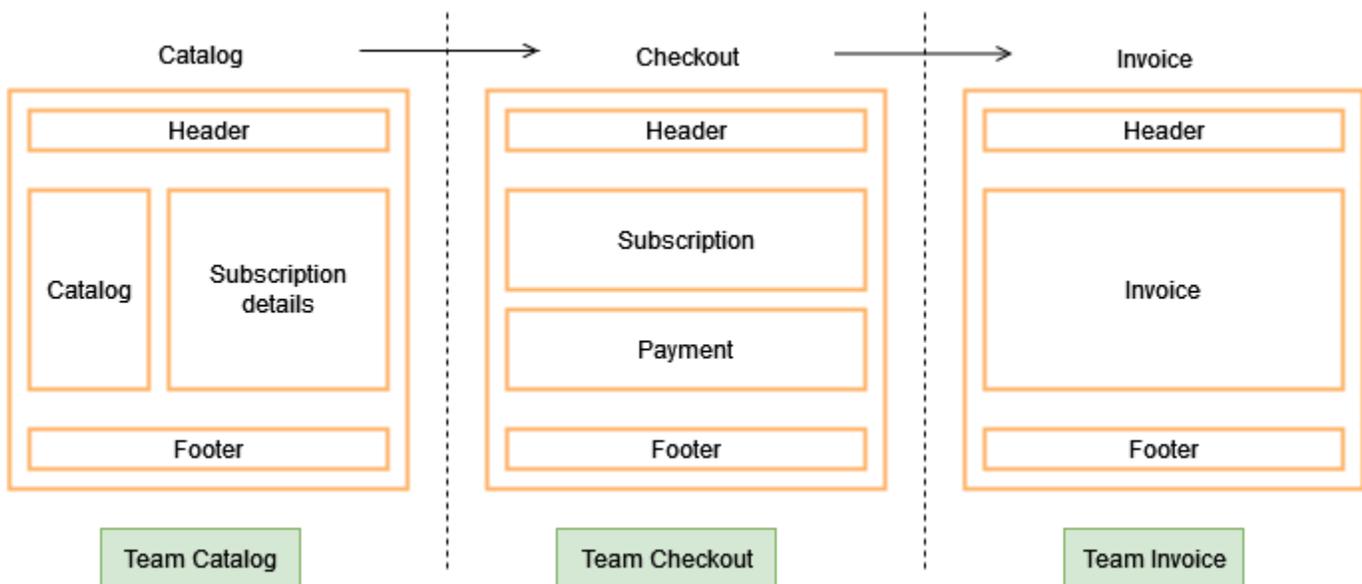
明確に定義された境界コンテキストでは、機能上の重複と、コンテキスト間でのランタイム通信の必要性を最小限に抑える必要があります。必要な通信は、イベント駆動型の方法で実装できます。これは、マイクロサービス開発のイベント駆動型アーキテクチャとは異なります。

適切に設計されたアプリケーションは、お客様に一貫したエクスペリエンスを提供するために、新しいチームによる将来の拡張の提供もサポートする必要があります。

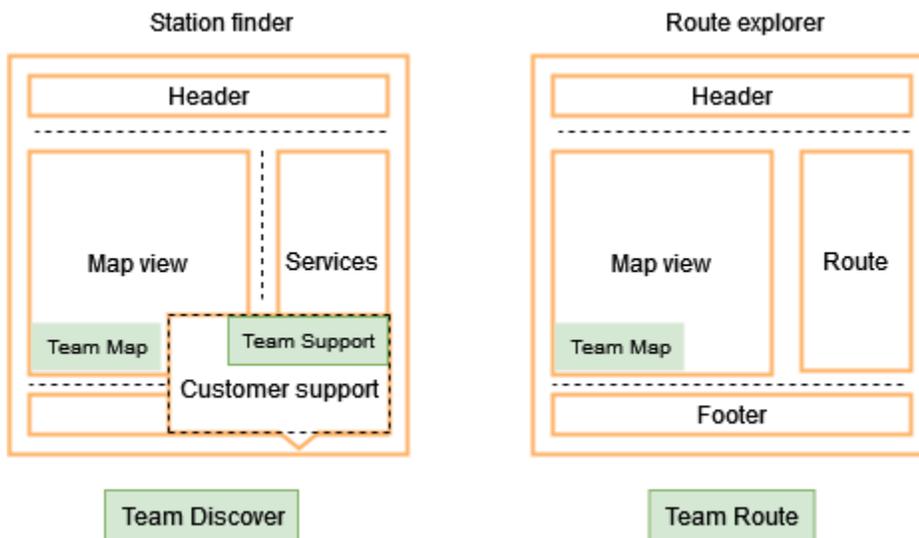
モノリシックアプリケーションをマイクロフロントエンドにスライスする方法

概要セクションには、ウェブページで独立した機能コンテキストを識別する例が含まれていました。ユーザーインターフェイスの機能を分割するためのいくつかのパターンが現れます。

例えば、ビジネスドメインがユーザージャーニーの段階を形成する場合、フロントエンドの垂直分割を適用して、ユーザージャーニーのビューのコレクションをマイクロフロントエンドとして配信できます。次の図は、カタログ、チェックアウト、請求書の各ステップが別々のマイクロフロントエンドとして別々のチームによって配信される垂直分割を示しています。



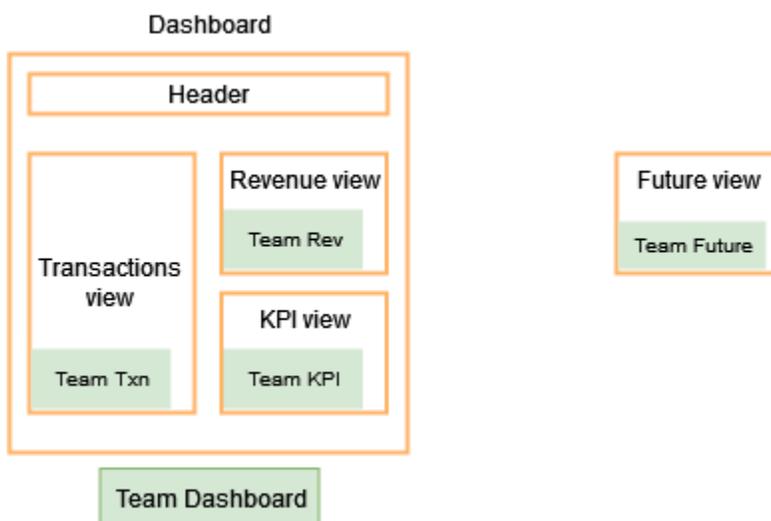
一部のアプリケーションでは、垂直分割だけでは十分ではない場合があります。例えば、一部の機能を多くのビューで提供する必要がある場合があります。これらのアプリケーションには、混合分割を適用できます。次の図は、Station Finder と Route Explorer のマイクロフロントエンドの両方がマップビュー機能を使用する混合分割ソリューションを示しています。



ポータルタイプまたはダッシュボードタイプのアプリケーションは、通常、フロントエンド機能を1つのビューにまとめます。これらのタイプのアプリケーションでは、各ウィジェットをマイクロフロントエンドとして配信でき、ホスティングアプリケーションはマイクロフロントエンドが実装する必要がある制約とインターフェイスを定義します。

このアプローチは、ビューポートのサイジング、認証プロバイダー、構成設定、メタデータなどの懸念をマイクロフロントエンドが処理するメカニズムを提供します。これらのタイプのアプリケーションは、拡張性のために最適化されます。新機能は、ダッシュボード機能を拡張するために新しいチームによって開発できます。

次の図は、チームダッシュボードの一部である3つのチームによって開発されたダッシュボードアプリケーションを示しています。



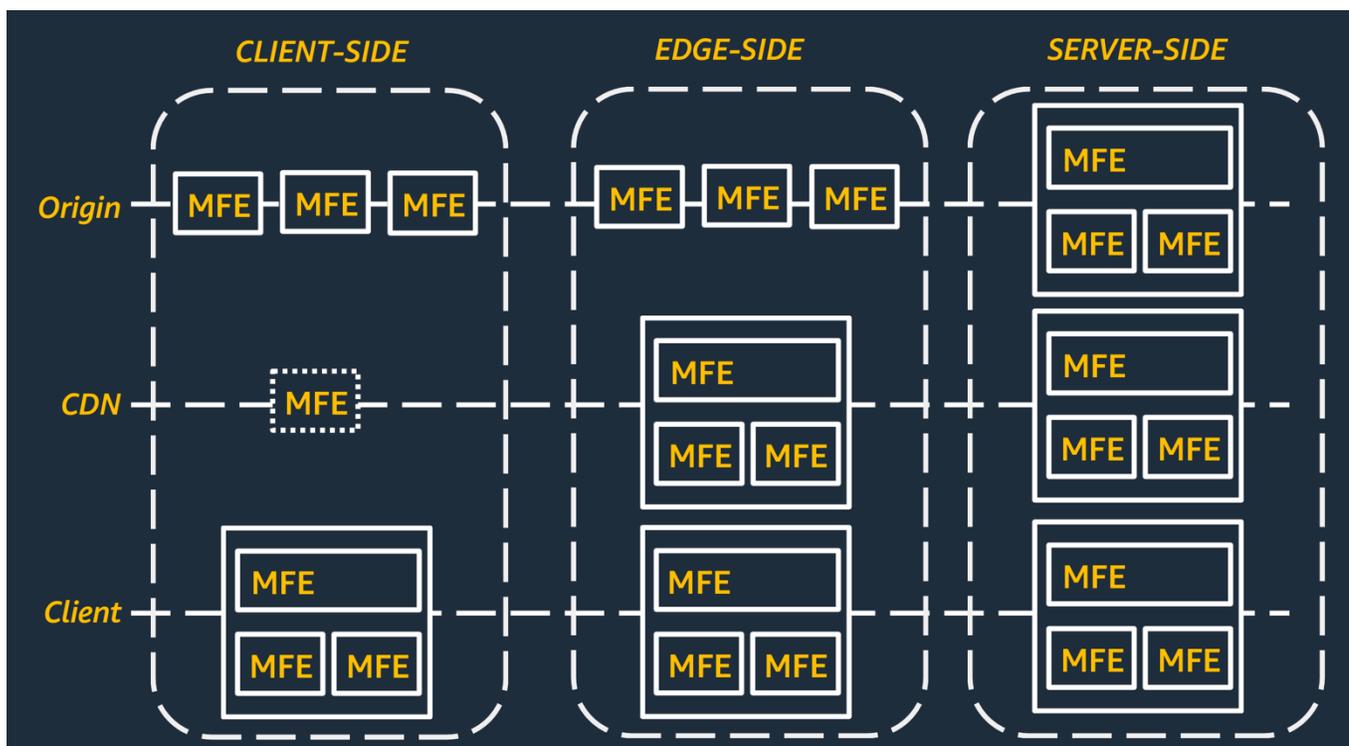
この図では、将来のビューは、チームダッシュボードとダッシュボード機能をスケールするために新しいチームが開発した新機能を表しています。

ポータルアプリケーションとダッシュボードアプリケーションは通常、UI で混合分割を使用して機能を構成します。マイクロフロントエンドは、位置やサイズの制約など、明確に定義された設定で設定できます。

マイクロフロントエンドを使用したページとビューの作成

クライアント側のコンポジション、エッジ側のコンポジション、サーバー側のコンポジションを使用して、アプリケーションのビューを作成できます。構成パターンには、必要なチームスキル、耐障害性、パフォーマンス、キャッシュ動作の点で異なる特性があります。

次の図は、マイクロフロントエンドアーキテクチャのクライアント側、エッジ側、サーバー側のレイヤーで構成がどのように行われるかを示しています。



クライアント側、エッジ側、サーバー側のレイヤーについては、以下のセクションで説明します。

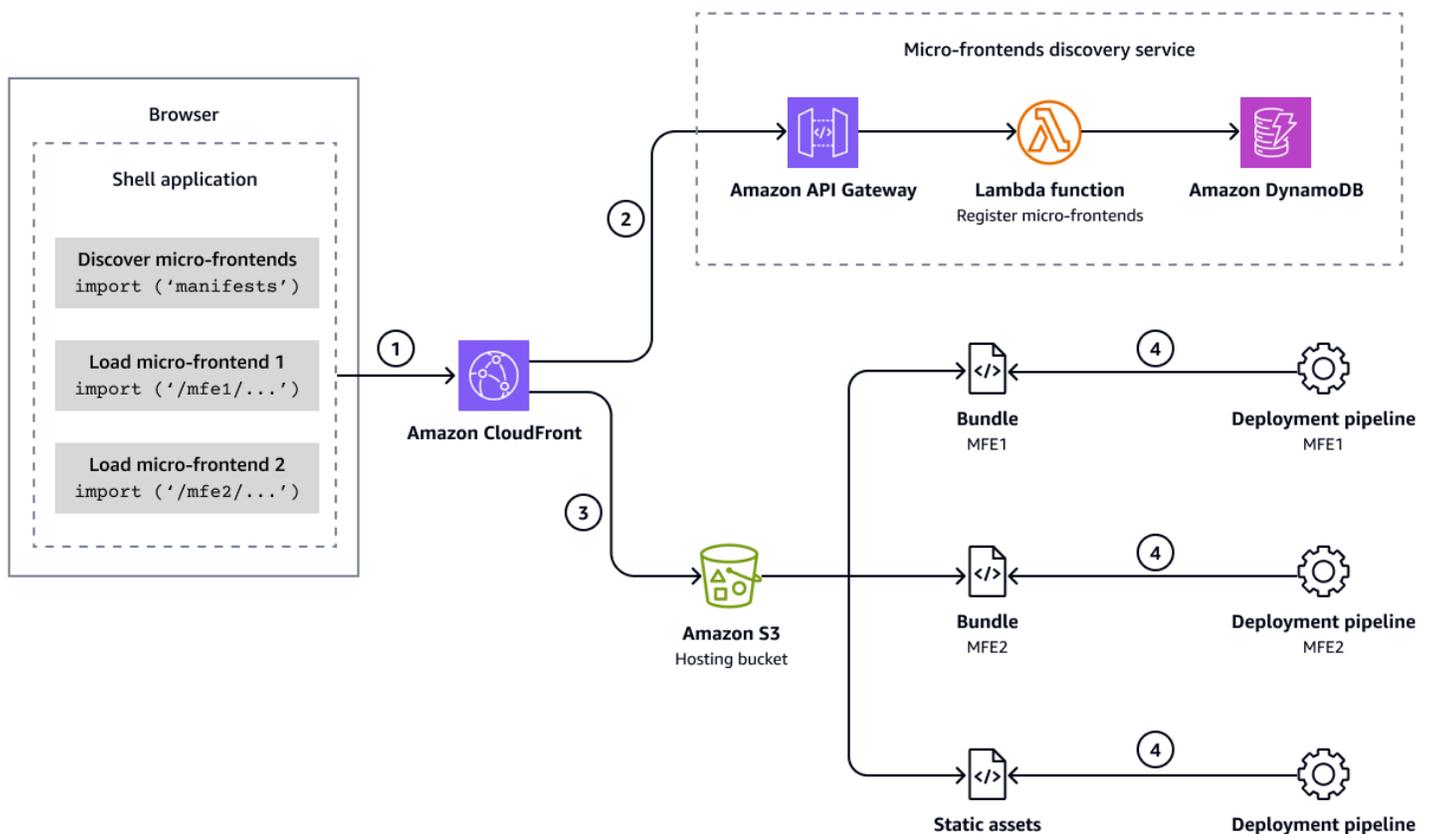
クライアントサイドコンポジション

クライアント (ブラウザまたはモバイルウェブビュー) で、ドキュメントオブジェクトモデル (DOM) フラグメントとしてマイクロフロントエンドを動的にロードして追加します。JavaScript や CSS

ファイルなどのマイクロフロントエンドアーティファクトは、コンテンツ配信ネットワーク (CDNs からロードしてレイテンシーを短縮できます。クライアント側の構成には、以下が必要です。

- シェルアプリケーションまたはマイクロフロントエンドフレームワークを所有および維持し、ブラウザで実行時にマイクロフロントエンドコンポーネントを検出、ロード、レンダリングできるようにするチーム
- HTML、CSS、などのフロントエンドテクノロジーにおける高度なスキルレベル JavaScript、およびブラウザ環境の深い理解
- グローバル名前空間の競合を避けるためのページへの JavaScript ロード量の最適化と統制

次の図は、サーバーレスクライアント側構成の AWS アーキテクチャの例を示しています。



クライアント側のコンポジションは、シェルアプリケーションを介してブラウザ環境で行われます。この図は、次の詳細を示しています。

1. シェルアプリケーションがロードされると、[Amazon CloudFront](#) に最初のリクエストを行い、マニフェストエンドポイントを介してロードされるマイクロフロントエンドを検出します。

2. マニフェストには、各マイクロフロントエンドに関する情報 (名前、URL、バージョン、フォールバック動作など) が含まれます。マニフェストは、マイクロフロントエンド検出サービスによって提供されます。この図では、この検出サービスは Amazon API Gateway、AWS Lambda 関数、および Amazon DynamoDB で表されています。シェルアプリケーションは、マニフェスト情報を使用して、特定のレイアウト内のページの作成を個々のマイクロフロントエンドにリクエストします。
3. 各マイクロフロントエンドバンドルは、静的ファイル (JavaScript、CSS、HTML など) で構成されます。ファイルは [Amazon Simple Storage Service \(Amazon S3\)](#) バケットでホストされ、を通じて提供されます CloudFront。
4. チームは、所有するデプロイパイプラインを使用して、新しいバージョンのマイクロフロントエンドをデプロイし、マニフェスト情報を更新できます。

エッジサイドコンポジション

オリジンサーバーの前にある一部の CDN やプロキシでサポートされているエッジサイドインクルード (DDoS) やサーバーサイドインクルード (SSI) などの除外手法を使用して、クライアントにワイヤ経由で送信する前にページを作成します。には以下が必要です。

- 機能を持つ CDN、またはサーバー側のマイクロフロントエンドの前にプロキシをデプロイします。HAProxy、Varnish、NGINX などのプロキシ実装は SSI をサポートします。
- と SSI の実装の使用と制限を理解している。

通常、新しいアプリケーションを開始するチームは、コンポジションパターンにエッジサイドコンポジションを選択しません。ただし、このパターンは、トランスクルージョンに依存するレガシーアプリケーションのパスを提供する可能性があります。

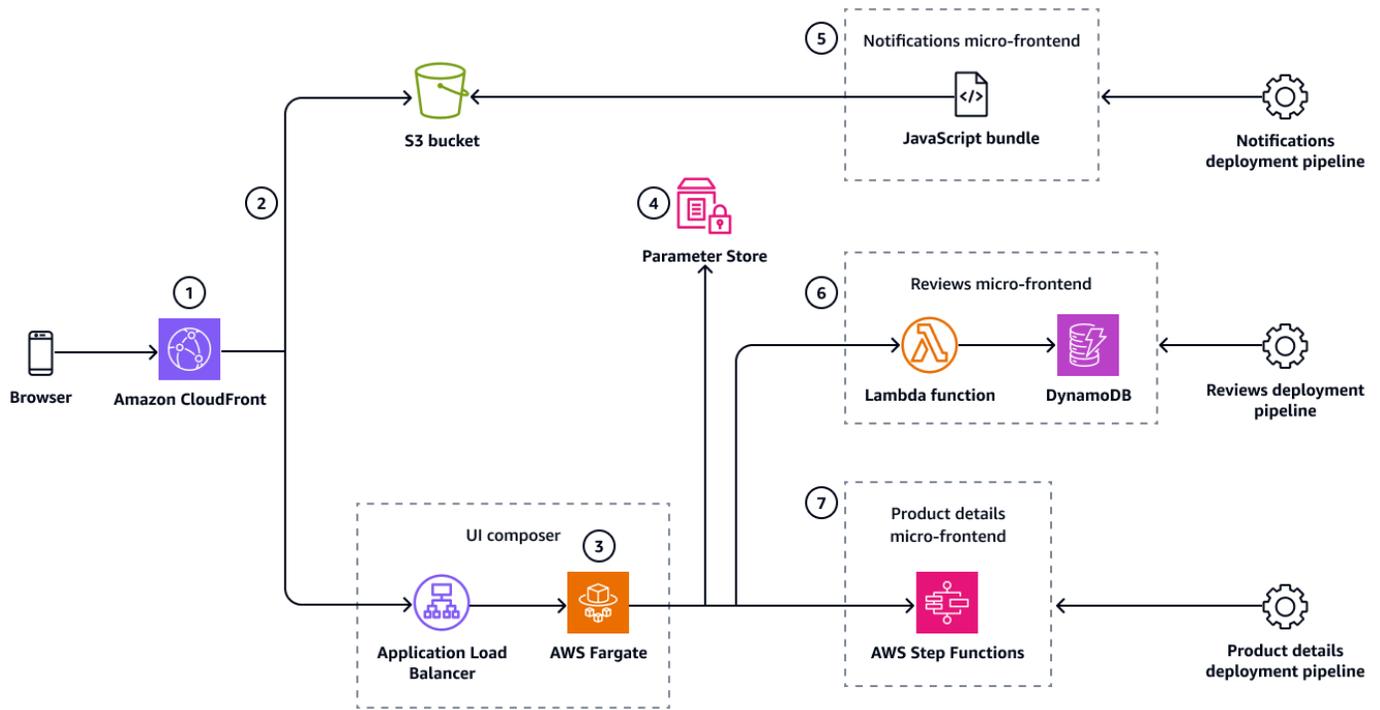
サーバーサイドコンポジション

オリジンサーバーを使用して、エッジにキャッシュされる前にページを作成します。これは、PHP、Jakarta Server Pages (JSP)、テンプレートライブラリなどの従来のテクノロジーを使用して、マイクロフロントエンドのフラグメントを含めることでページを構成できます。サーバーで実行されている Next.js などの JavaScript フレームワークを使用して、サーバー側のレンダリング (SSR) でサーバー上のページを作成することもできます。

ページがサーバーでレンダリングされたら、CDN にキャッシュしてレイテンシーを短縮できます。新しいバージョンのマイクロフロントエンドがデプロイされると、ページを再レンダリングし、キャッシュを更新して最新バージョンを顧客に配信する必要があります。

サーバー側の構成では、デプロイ、サーバー側のマイクロフロントエンドの検出、キャッシュ管理のパターンを確立するために、サーバー環境を深く理解する必要があります。

次の図は、サーバー側の構成を示しています。



この図には、以下のコンポーネントとプロセスが含まれています。

1. [Amazon CloudFront](#) は、アプリケーションに一意のエントリーポイントを提供します。ディストリビューションには 2 つのオリジンがあります。1 つ目は静的ファイル用、2 つ目は UI コンポーザー用です。
2. 静的ファイルは [Amazon S3](#) バケットでホストされます。これらは、HTML テンプレートのブラウザと UI コンポーザーによって消費されます。
3. UI コンポーザーは、のコンテナクラスターで実行されます [AWS Fargate](#)。コンテナ化されたソリューションでは、必要に応じてストリーミング機能とマルチスレッドレンダリングを使用できます。
4. の一機能である [Parameter Store](#) は AWS Systems Manager、基本的なマイクロフロントエンド検出システムとして使用されます。この機能は、消費するマイクロフロントエンドエンドポイントを取得するために UI コンポーザーが使用するキーバリューストアを提供します。
5. 通知マイクロフロントエンドは、最適化された JavaScript バンドルを S3 バケットに保存します。これは、ユーザーインタラクションに反応する必要があるため、クライアントでレンダリングされます。

6. レビューのマイクロフロントエンドは [Lambda](#) 関数によって構成され、ユーザーレビューは [DynamoDB](#) に保存されます。レビューのマイクロフロントエンドはサーバー側で完全にレンダリングされ、HTML フラグメントを出力します。
7. 製品の詳細マイクロフロントエンドは、を使用するローコードのマイクロフロントエンドです [AWS Step Functions](#)。Express ワークフローは同期的に呼び出すことができ、HTML フラグメントとキャッシュレイヤーをレンダリングするためのロジックが含まれています。

サーバー側の構成の詳細については、ブログ記事 [「サーバー側のレンダリングマイクロフロントエンドアーキテクチャ」](#) を参照してください。

マイクロフロントエンド間のルーティングと通信

ルーティングオプションは構成アプローチによって異なります。フロントエンドコンポーネント間の結合を減らすことで、通信を最適化できます。

ルーティング

垂直分割でクライアント側のコンポジションを使用するアプリケーションは、サーバー側のルーティング (複数ページアプリケーション) またはクライアント側のルーティング (単一ページアプリケーション) を使用できます。UI コンポジションに混合分割を使用する場合は、ページ上のマイクロフロントエンドのより深いルーティング階層をサポートするために、クライアント側のルーティングが必要です。

エッジサイドコンポジションとサーバーサイドコンポジションを使用するアプリケーションは、サーバーサイドルーティング、または Amazon での [Lambda@Edge](#) などのエッジコンピューティングによるルーティングにより適しています [CloudFront](#)。

マイクロフロントエンド間の通信

マイクロフロントエンドアーキテクチャでは、フロントエンドコンポーネント間の結合を減らすことをお勧めします。結合を減らす方法の 1 つは、同期関数呼び出しから非同期メッセージングへの移行です。

ブラウザランタイムとユーザーインタラクションは、本質的に非同期です。イベントは、メッセージを通じてプロデューサーとコンシューマーの間で交換できます。イベントは、マイクロフロントエンド間で通信するための明確に定義されたインターフェイスを提供します。

DDD プラクティスに従ってマイクロフロントエンドの境界コンテキストを特定する場合、次のステップは境界を越えて通信する必要があるイベントを特定することです。

イベントのメッセージングメカニズムは、プラットフォームチームが提供するネイティブ DOM イベント (CustomEvents)、JavaScript イベントエミッター、またはリアクティブストリームライブラリです。マイクロフロントエンドはイベントを発行し、境界コンテキストに関連するイベントをサブスクライブします。この方法では、パブリッシャーとサブスクライバーが互いに認識し合う必要はありません。契約はイベント定義です。この視覚的な表現については、「[イベントアーキテクチャ図で境界コンテキストの](#)」の「[イベントと通信](#)」セクションを参照してください。

クロスカットの懸念に対する依存関係の管理

マイクロフロントエンドなどの分散アーキテクチャを成功させるには、意識的な依存関係管理が不可欠です。依存関係管理は、マイクロフロントエンド開発の最も困難な部分の 1 つです。

マイクロフロントエンドアーキテクチャでは、依存関係管理の 2 つの重要な点は、大きなコードアーティファクトをクライアントに転送することによるパフォーマンス上のペナルティと、コンピューティングリソースのオーバーヘッドです。理想的には、組織は分散フロントエンドアーキテクチャの依存関係を維持する方法を義務付ける必要があります。

依存関係のメンテナンスを義務付けるための実行可能な戦略は、インポートマップなどのウェブ標準とモジュールフェデレーションを使用して、を共有しないことです。他のアプローチは、分散アーキテクチャの基本原則に違反するため、アンチパターンです。

可能な場合は何も共有しない

共有なしのアプローチでは、独立したソフトウェアアーティファクト間の依存関係をまったく共有しないこと、または少なくとも統合時やランタイム時に共有しないことを前提としています。つまり、2 つのマイクロフロントエンドが同じライブラリに依存している場合、それぞれがビルド時にライブラリ内でベークし、個別に出荷する必要があります。また、各マイクロフロントエンドは、ライブラリがグローバル名前空間と共有リソースをポーリングしないことを検証する必要があります。

これは冗長化につながりますが、最大の俊敏性を持つ意識的なトレードオフです。ランタイムの依存関係を共有しない場合、チームはソリューションの範囲内でソフトウェアを進化させ、インターフェイス契約を破らない限り、どのような方法でもソフトウェアを進化させる最大限の柔軟性が得られます。

マイクロフロントエンドが共有なしの原則に従うプラットフォームでは、マイクロフロントエンドを可能な限り軽量に保つことが重要です。これには、パフォーマンスのためにマイクロフロントエンドを最適化することに熟練し、デベロッパーエクスペリエンスのためにユーザーエクスペリエンスを犠牲にしないデベロッパーが必要です。

コードを共有する場合

一部のコードを共有する決定をするときは、ライブラリまたはランタイムモジュールとして共有できます。例えば、フロントエンドコアチームは CDNs を介してマイクロフロントエンド用のライブラリを提供します。ビジネスバリューチームは、実行時にライブラリをロードすることも、パッケージリポジトリを使用してライブラリを公開することもできます。マイクロフロントエンドチームは、ハイブリッドフレームワークを使用するモバイルアプリケーションと同様に、ビルド時にパッケージ化されたライブラリの特定のバージョンに対して開発できます。

3 つ目のオプションは、プライベートパッケージレジストリを使用して、共通ライブラリのビルド時の統合をサポートすることです。これにより、ライブラリ契約の重大な変更によって実行時にエラーが発生するリスクが軽減されます。ただし、このより保守的なアプローチでは、すべてのマイクロフロントエンドを新しいライブラリバージョンと同期させるために、より多くのガバナンスが必要です。

ページのロード時間を短縮するために、マイクロフロントエンドはライブラリの依存関係を外部化して、Amazon などの CDN からキャッシュされたチャンクからロードできます CloudFront。

ランタイムの依存関係を管理するために、マイクロフロントエンドはインポートマップ (または などのライブラリ System.js) を使用して、実行時に各モジュールがどこからロードされるかを指定できます。webpack モジュールフェデレーションは、リモートモジュールのホストバージョンをポイントし、独立したマイクロフロントエンド間で共通の依存関係を解決するもう 1 つのアプローチです。

もう 1 つの方法は、[検出エンドポイント](#) への最初のリクエストを使用してインポートマップの動的ロードを容易にすることです。

共有状態

マイクロフロントエンドの結合を減らすには、モノリシックアーキテクチャと同様に、同じビュー内のすべてのマイクロフロントエンドからアクセス可能なグローバル状態管理を避けることが重要です。例えば、グローバル Redux ストアをすべてのマイクロフロントエンドからアクセス可能にすると、結合が増加します。

共有状態を排除するパターンは、マイクロフロントエンド内にカプセル化し、前述のように非同期メッセージと通信することです。

どうしても必要な場合は、グローバル状態に明確に定義されたインターフェイスを導入し、予期しない動作を避けるために読み取り専用共有をオプトインします。

- 垂直分割が存在する場合は、URL コンポーネントとブラウザストレージを使用してホスト環境の情報にアクセスできます。
- 分割が混在している場合は、イベントエミッタや双方向ストリームなどの DOM 標準のカスタムイベントまたは JavaScript ライブラリを使用して、マイクロフロントエンドに情報を渡すこともできます。

マイクロフロントエンド間で複数の情報を共有する必要がある場合は、マイクロフロントエンドの境界を再検討することをお勧めします。共有の必要性は、ビジネスの進化や初期設計が不十分なことが原因である可能性があります。

また、サーバー側のセッションを使用することもできます。各マイクロフロントエンドは、セッション識別子を使用して必要なデータを取得します。結合を減らすには、共有状態を排除し、マイクロフロントエンド固有のセッションデータを分離しておくことが重要です。

フレームワークとツール

Angular や Next.js などのフロントエンドフレームワークは不足していませんが、ほとんどはマイクロフロントエンドを念頭に置いて作成されていません。したがって、マイクロフロントエンドアーキテクチャの課題に対処するメカニズムが欠落することがあります。

フレームワークに関する一般的な考慮事項

このガイドは、個々のフレームワークを推奨したり比較したりすることを目的としていません。複数のマイクロフロントエンドが同じウェブアプリケーションページで実行されることが多いため、ロードとランタイムのパフォーマンスが主な懸念事項です。オーバーヘッドをできるだけ少なくするフレームワークを選択することが重要です。

フレームワークは、レンダリングレイヤーに基づいて分割されます。

- クライアント側のレンダリング (CSR)
- サーバーサイドレンダリング (SSR)

フロントエンドアーキテクチャには、静的サイト生成 (SSG) などの他の機能が含まれます。ただし、SSG は 1 回のみ実行されます。マイクロフロントエンドは主に実行時に構成されるため、CSR と SSR が主なオプションです。

クライアント側のレンダリング

CSR には、次の 2 つの一般的なオプションがあります。

- 単一 SPA フレームワーク
- モジュールフェデレーション

シングル SPA は、マイクロフロントエンドを作成するための軽量な選択肢です。同じページに複数のマイクロフロントエンドを作成し、依存関係の競合を回避するなど、マイクロフロントエンドアーキテクチャの最も一般的な課題を解決します。

モジュールフェデレーションは Webpack 5 が提供するプラグインとして開始され、さまざまなアーティファクトにわたる依存関係管理など、マイクロフロントエンドアーキテクチャにおける課題の大部分を解決します。モジュールフェデレーション 2.0 は、Rspack、webpack、esbuild とネイティブに連携し、現在は と連携し JavaScript。

フレームワークをまったく使用しないことを検討してください。caniuse.com によると、最新のブラウザは市場シェアが 98% で、カスタム要素などの機能をネイティブに提供しており、マイクロフロントエンドアプリケーションに適しています。必要に応じて、イベント伝達、国際化、またはその他の特定の懸念のために、カスタム要素を軽量ライブラリと組み合わせてください。

サーバー側のレンダリング

SSR 側では、2 つの主なオプションがより複雑です。

- Next.js などの既存のフレームワークを受け入れ、モジュールフェデレーションを使用するマイクロフロントエンドの原則を適用します。
- HTML over-the-wire を使用して、マイクロフロントエンドを表す HTML フラグメントを交換し、実行時にテンプレート内でこれらのフラグメントを構成します。このアプローチの例は、Podium です。

API 統合 – フロントエンドのバックエンド

フロントエンドのバックエンド (BFF) パターンは、通常、マイクロサービス環境で使用されます。マイクロフロントエンドのコンテキストでは、BFF はマイクロフロントエンドに属するサーバー側のサービスです。すべてのマイクロフロントエンドに BFF が必要なわけではありません。ただし、BFF を使用している場合は、同じ境界コンテキスト内で実行する必要があり、他の境界コンテキスト間で共有することはできません。

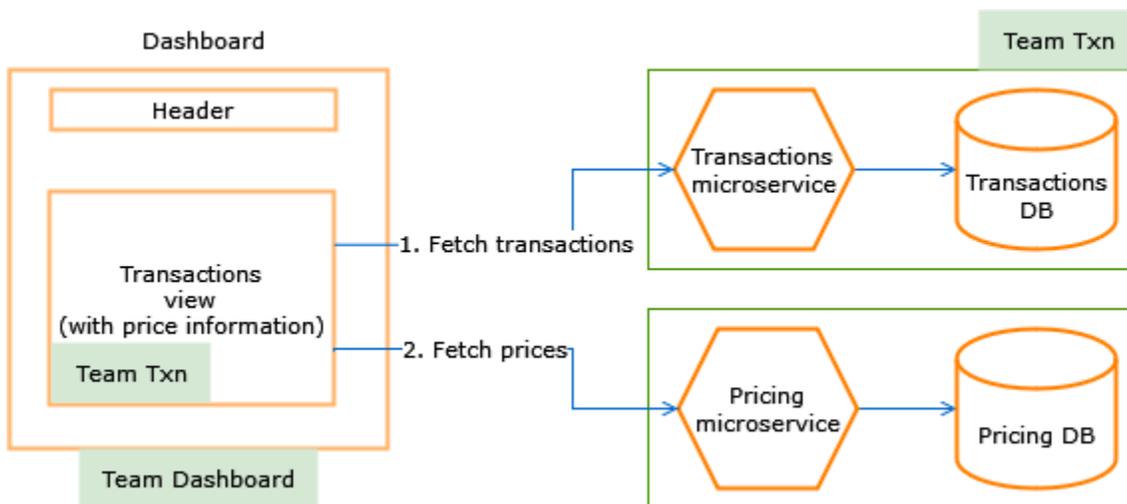
従来のサービスとは異なり、BFF はドメインモデルに従っていません。代わりに、マイクロフロントエンドがクライアントに到達する前にデータを前処理するための API レイヤーです。これが役立つ領域は次のとおりです。

- プライベート APIs に対する認可
- さまざまなソースからのデータの集約
- データの変換によるネットワーク負荷の軽減とクライアントによるデータの消費の容易化

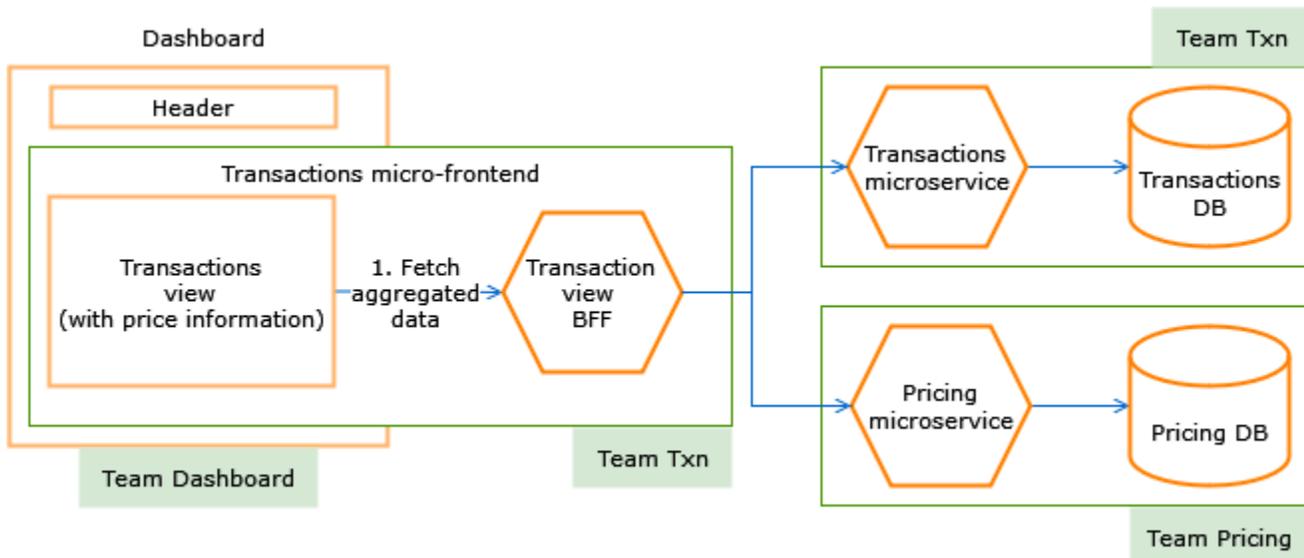
そのため、BFF はドメインサービス層ではなくマイクロフロントエンドによって所有されます。BFFs は、以下を使用してデプロイできます。

- AWS AppSync GraphQL APIs
- AWS Lambda 関数のセット
- Amazon ECS、Amazon EKS、または AWS で実行されているコンテナとして AppRunner

次の図は、BFF パターンがないと、マイクロフロントエンドが個々のマイクロサービス API エンドポイントに接続してデータを取得および集計する必要があることを示しています。



代わりに、次の図の BFF パターンを使用すると、マイクロフロントエンドは独自のバックエンドと通信し、集約データを取得できます。



チームは、モバイル、ウェブ、または特定のビューなど、さまざまなチャネルの BFFsを開発できます。これには、チャットを減らすことでバックエンドインタラクションを最適化する要件があります。

スタイリングと CSS

カスケードスタイルシート (CSS) は、テキストとオブジェクトの書式をハードコーディングするのではなく、ドキュメントの表示を一元的に決定するための言語です。言語のカスケード機能は、継承を使用してスタイル間の優先順位を制御するように設計されています。マイクロフロントエンドで作業し、依存関係を管理する戦略を作成する場合、言語のカスケード機能は難しい場合があります。

例えば、2 つのマイクロフロントエンドが同じページに共存し、それぞれが HTML body 要素の独自のスタイルを定義します。それぞれが独自の CSS ファイルを取得し、style タグを使用して DOM にアタッチする場合、共通の HTML 要素、クラス名、または要素 IDs。これらの問題に対処するには、スタイルを管理するために選択する依存関係戦略に応じて、さまざまな戦略があります。

現在、パフォーマンス、一貫性、デベロッパーエクスペリエンスのバランスをとる最も一般的なアプローチは、設計システムの開発と保守です。

システムを設計する – 何かを共有するアプローチ

このアプローチでは、システムを使用して、必要に応じてスタイルを共有し、時折の発散をサポートして、一貫性、パフォーマンス、デベロッパーエクスペリエンスのバランスを取ります。設計システムは、明確な標準に基づいて再利用可能なコンポーネントのコレクションです。設計システムの開発は通常、多くのチームからのインプットと貢献を持つ 1 つのチームによって推進されます。実際には、設計システムは、JavaScript ライブラリとしてエクスポートできる低レベルの要素を共有する方法です。マイクロフロントエンドデベロッパーは、事前に作成された利用可能なリソースを作成し、新しいインターフェイスを作成するための出発点として、ライブラリを依存関係として使用してシンプルなインターフェイスを構築できます。

フォームを必要とするマイクロフロントエンドの例を考えてみましょう。一般的なデベロッパーエクスペリエンスは、設計システムで使用可能な事前に作成されたコンポーネントを使用して、テキストボックス、ボタン、ドロップダウンリスト、その他の UI 要素を構成することです。デベロッパーは、実際のコンポーネントの外観についてのみ、スタイル設定を記述する必要はありません。構築およびリリースするシステムは、Webpack モジュールフェデレーションまたは同様のアプローチを使用して設計システムを外部依存関係として宣言できるため、フォームのロジックは設計システムを含めずにパッケージ化されます。

その後、複数のマイクロフロントエンドが同じ操作を行って、共有された懸念に対処できます。チームが複数のマイクロフロントエンド間で共有できる新しいコンポーネントを開発すると、それらのコンポーネントは成熟後に設計システムに追加されます。

設計システムアプローチの主な利点は、高いレベルの一貫性です。マイクロフロントエンドはスタイルを記述し、設計システムからスタイルを上書きすることがありますが、その必要性はほとんどありません。主な低レベル要素は頻繁に変更されず、デフォルトで拡張可能な基本的な機能を提供します。もう 1 つの利点はパフォーマンスです。構築とリリースの優れた戦略により、アプリケーションシエルによって実装される最小限の共有バンドルを生成できます。複数のマイクロフロントエンド固有のバンドルがオンデマンドで非同期的にロードされ、ネットワーク帯域幅のフットプリントが最小限に抑えられる場合、さらに改善できます。最後に、デベロッパーエクスペリエンスは理想的です。これは、ユーザーがホイールを再考案することなく、リッチインターフェイスの構築に集中できるためです (ボタンがページに追加されるたびに CSS JavaScript を記述するなど)。

欠点は、あらゆる種類の設計システムが依存関係であるため、維持し、場合によっては更新する必要があります。複数のマイクロフロントエンドで共有依存関係の新しいバージョンが必要な場合は、次のいずれかを使用できます。

- 競合することなく、その共有依存関係の複数のバージョンをフェッチできるオーケストレーションメカニズム
- すべての依存関係を新しいバージョンを使用するように移行する共有戦略

例えば、すべてのマイクロフロントエンドが設計システムのバージョン 3.0 に依存しており、共有方式で使用する 3.1 という新しいバージョンがある場合、すべてのマイクロフロントエンドに機能フラグを実装して、最小限のリスクで移行できます。詳細については、「[機能フラグ](#)」セクションを参照してください。もう 1 つの潜在的な欠点は、設計システムが通常、スタイル設定よりも多く対処することです。また、JavaScript プラクティスやツールも含まれます。これらの側面では、議論とコラボレーションを通じて合意に達する必要があります。

設計システムの実装は、長期的な投資として最適です。これは一般的なアプローチであり、複雑なフロントエンドアーキテクチャに取り組んでいるすべての人が検討する必要があります。通常、フロントエンドのエンジニア、製品および設計チームが協力して相互にやり取りするメカニズムを定義する必要があります。目的の状態になるまでの時間をスケジュールすることが重要です。また、長期的に信頼性が高く、適切に維持され、パフォーマンスの高いものを構築できるように、リーダーシップからスポンサーシップを受けることが重要です。

完全にカプセル化された CSS – 何も共有しないアプローチ

各マイクロフロントエンドは、規則とツールを使用して CSS のカスケード機能を克服します。例としては、各要素のスタイルが常に要素の ID ではなくクラス名に関連付けられ、クラス名は常に一意であることが挙げられます。このようにして、すべては個々のマイクロフロントエンドに限定され、

不要な競合のリスクが最小限に抑えられます。アプリケーションシェルは通常、マイクロフロントエンドのスタイルを DOM にロードした後、ロードしますが、一部のツールはを使用してスタイルをバンドルします JavaScript。

何も共有しない主な利点は、マイクロフロントエンド間で競合が発生するリスクを減らすことです。もう一つの利点は、開発者の経験です。各マイクロフロントエンドは、他のマイクロフロントエンドと何も共有しません。単独でのリリースとテストは、より簡単かつ迅速です。

共有なしアプローチの主な欠点は、一貫性の欠如の可能性です。整合性を評価するシステムはありません。共有内容の複製が目標であっても、リリースとコラボレーションのスピードのバランスをとると困難になります。一般的な緩和策は、整合性を測定するツールを作成することです。例えば、ヘッドレスブラウザを使用してページにレンダリングされた複数のマイクロフロントエンドの自動スクリーンショットを撮るシステムを作成できます。その後、リリース前にスクリーンショットを手動で確認できます。ただし、これには統制とガバナンスが必要です。詳細については、[「調整による Balancing の自律性」](#) セクションを参照してください。

ユースケースによっては、パフォーマンスがもう一つの欠点となる可能性があります。すべてのマイクロフロントエンドで大量のスタイルを使用する場合、お客様は重複したコードを多数ダウンロードする必要があります。これはユーザーエクスペリエンスに悪影響を及ぼします。

この共有なしのアプローチは、少数のチームのみを含むマイクロフロントエンドアーキテクチャ、または低い一貫性を許容できるマイクロフロントエンドでのみ考慮する必要があります。また、組織が設計システムに取り組んでいますが、これは自然な最初のステップになることもあります。

共有グローバル CSS – 共有オールアプローチ

このアプローチでは、スタイル設定に関連するすべてのコードが中央リポジトリに保存され、寄稿者は CSS ファイルを操作するか、Sass などのプリプロセッサを使用してすべてのマイクロフロントエンドの CSS を書き込みます。変更が行われると、ビルドシステムは CDN でホストし、アプリケーションシェルによって各マイクロフロントエンドに含めることができる単一の CSS バンドルを作成します。マイクロフロントエンドデベロッパーは、ローカルでホストされるアプリケーションシェルを介してコードを実行することで、アプリケーションを設計および構築できます。

このアプローチの利点は、マイクロフロントエンド間の競合リスクを軽減するという明らかな利点とは別に、一貫性とパフォーマンスです。ただし、マークアップやロジックからスタイルを切り離すと、デベロッパーはスタイルの使用法、進化する方法、廃止方法を理解するのが難しくなります。例えば、既存のクラスとそのプロパティを編集した場合の結果について学ぶよりも、新しいクラス名を導入する方が速い場合があります。新しいクラス名を作成するデメリットは、バンドルサイズの増

加です。これはパフォーマンスに影響し、ユーザーエクスペリエンスに不整合が生じる可能性があります。

共有グローバル CSS は移行の出発点 monolith-to-micro-frontendsになる可能性があります。複数のチームや2つのチームが連携するマイクロフロントエンドアーキテクチャにとって有益であることはほとんどありません。設計システムの開発中は、できるだけ早く設計システムに投資し、共有なしのアプローチを実装することをお勧めします。

組織と作業方法

すべてのアーキテクチャ戦略と同様に、マイクロフロントエンドは、組織が実装することを選択するテクノロジーよりもはるかに大きな意味を持ちます。マイクロフロントエンドアプリケーションを構築する決定は、ビジネス、製品、組織、運用、さらには文化 (チームの権限付与や意思決定の分散など) と一致する必要があります。その代わりに、このタイプのマイクロフロントエンドアーキテクチャは、真の俊敏性、製品主導の開発をサポートします。これは、そうでなければ独立したチーム間の通信オーバーヘッドを大幅に削減するためです。

アジャイル開発

アジャイルソフトウェア開発の概念は、ここ数年で非常に一般的になり、事実上すべての組織がアジャイルに取り組むと主張しています。アジャイルの決定的な定義はこの戦略の範囲外ですが、マイクロフロントエンド開発に関連する主要な要素を確認する価値があります。

アジャイルパラダイムの基盤は[アジャイルマニフェスト \(2001\)](#)です。このマニフェストは、4つの主要な原則 (「プロセスやツールに対する個人とインタラクション」など) と 12 の原則を仮定しています。Scrum や Scaled Agile Framework (SAFe) などのプロセスフレームワークがアジャイルマニフェストを中心に出現し、日常的なプラクティスへの道を見つけました。ただし、その背後にある哲学は、ほとんど誤解または無視されます。

マイクロフロントエンドアーキテクチャでは、以下のアジャイル原則を採用することが重要です。

- 「作業ソフトウェアを数週間から数か月まで頻繁に配信し、より短いタイムスケールを優先します。」

この原則は、段階的に作業し、ソフトウェアを可能な限り定期的に本番環境に配信することの重要性を強調しています。技術的な観点から見ると、これは継続的インテグレーションと継続的デリバリー (CI/CD) を指します。CI/CD では、構築、テスト、デプロイのためのツールとプロセスは、各ソフトウェアプロジェクトに不可欠な要素です。また、プリンシパルは、ランタイムインフラストラクチャと運用上の責任がチームによって所有されている必要があることも意味します。この所有権は、独立したサブシステムがインフラストラクチャと運用の要件を大幅に異なる可能性がある分散システムでは特に重要です。

- 「動機のある個人を中心にプロジェクトを構築します。必要な環境とサポートを提供し、それらを信頼してジョブを完了させます。」

「最高のアーキテクチャ、要件、設計は自己組織チームから生まれます」

これらの原則はどちらも、所有権、独立性、end-to-end 責任の利点を強調しています。マイクロフロントエンドアーキテクチャは、チームがマイクロフロントエンドを真に所有している場合 (および唯一の場合) に成功します。構想から設計、実装、デリバリー、運用まで、End-to-endの責任により、チームは実際に所有権を行使できます。この独立性は、チームが戦略的方向性を自律させるために、技術的にも組織的にも必要です。ウォーターフォール開発モデルを使用する一元化された組織では、マイクロフロントエンドプラットフォームを使用することはお勧めしません。

チームの構成と規模

ソフトウェアチームが所有権を行使するには、組織が課す境界内で、チームが提供する方法と内容を含め、自らを管理する必要があります。

効果的に機能するためには、チームはソフトウェアを個別に配信でき、配信する最善の方法を決定する権限を持っている必要があります。これらのアイテムの計画に関与せずに、外部製品マネージャーまたは外部デザイナーから UI 設計から機能要件を受け取るチームは、自律型と見なすことはできません。この機能が既存の契約や機能に違反する可能性があります。このような違反には、さらなる議論と交渉が必要であり、配信が遅れたり、チーム間で不要な競合が発生したりするリスクがあります。

同時に、チームが大きすぎないようにする必要があります。大規模なチームにはより多くのリソースがあり、個々の欠席に対応できますが、コミュニケーションの複雑さは新しいメンバーごとに指数関数的に増加します。ユニバーサルに有効な最大チームサイズを記述することはできません。プロジェクトに必要な人数は、チームの成熟度、技術的複雑さ、イノベーションのペース、インフラストラクチャなどの要因によって異なります。例えば、Amazon は 2 つのピザのルールに従います。2 つのピザを食べるには大きすぎるチームは、小さなチームに分割する必要があります。これは課題になる可能性があります。分割は自然の境界に沿って行われ、各チームに作業に対する自律性と所有権を与える必要があります。

DevOps 文化

DevOps は、開発ライフサイクルのステップが組織的および技術的な観点から緊密に統合されているソフトウェアエンジニアリングのプラクティスを指します。一般的な考え方とは対照的に、文化と考え方には DevOps あまり関係なく、役割とツールにもほとんど関係ありません。

従来、ソフトウェア組織には、設計、実装、テスト、デプロイ、運用などのスペシャリストチームがありました。チームがジョブを完了するたびに、プロジェクトは次のチームに引き渡されます。た

だし、サイロ化された専門チームを通じてソフトウェアを配信すると、引き継ぎ中に摩擦が発生します。同時に、スペシャリストが狭い焦点で作業を強制されると、隣接するドメインに関する知識が不足し、製品の体系的なビューがありません。これらの障害により、ソフトウェア製品の一貫性が低下する可能性があります。

例えば、ソフトウェアアーキテクトが別のチームの誰かが実装するソリューションを設計すると、実装の固有の側面 (依存関係の不一致など) が見落とされる可能性があります。その後、開発者 back-and-forth はショートカット (猿のパッチなど) を使用するか、アーキテクトと開発チームの間で形式化されたが開始されます。これらのプロセスを管理するオーバーヘッドにより、開発は (柔軟、適応的、段階的、非公式な意味で) アジャイルではなくなりました。

この用語 DevOps は主に文化に関連していますが、実際に DevOps 実現するテクノロジーとプロセスを意味します。DevOps は CI/CD と密接に関連しています。デベロッパーは、ソフトウェアの増分の実装を完了すると、Git などのバージョン管理システムにコミットします。従来、ビルドシステムはソフトウェアを構築して統合し、多かれ少なかれ統合され一元化されたプロセスでテストしてリリースしていました。CI/CD では、ソフトウェアの構築、統合、テスト、およびリリースは本質的に自動化されています。理想的には、このプロセスは、特定のプロジェクトに特に合わせた設定ファイルを通じてソフトウェアプロジェクト自体の一部です。

可能な限り多くのステップが自動化されます。例えば、ほぼすべてのタイプのテストを自動化できるため、手動テストのプラクティスを減らす必要があります。このようにプロジェクトを設定すると、ソフトウェア製品の更新を 1 日に数回、高い信頼性で配信できます。がサポートするもう 1 つのテクノロジー DevOps は、Infrastructure as Code (IaC) です。

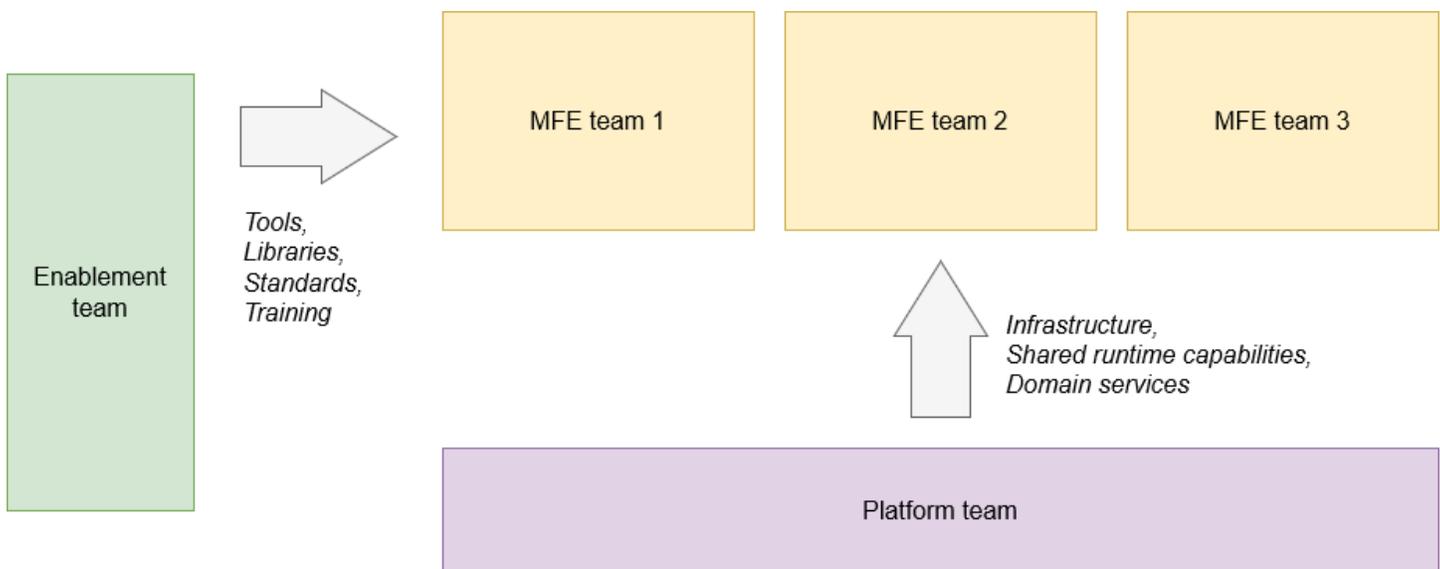
従来、IT インフラストラクチャをセットアップして維持するには、ハードウェア (データセンターでケーブルとサーバーをセットアップする) と運用ソフトウェアのインストールと保守を手動で行う必要があります。これは必要でしたが、多くの欠点がありました。セットアップに時間がかかり、エラーが発生しやすくなります。ハードウェアが過剰にプロビジョニングされたり、プロビジョニングが不足したりすることがよくあり、過剰な支出やパフォーマンスの低下につながります。IaC を使用すると、クラウドサービスを自動的にデプロイして更新できる設定ファイルを通じて IT システムのインフラストラクチャ要件を記述できます。

これらすべてがマイクロフロントエンドとどのような関係がありますか？ DevOps、CI/CD、IaC は、マイクロフロントエンドアーキテクチャを補完するのに理想的です。マイクロフロントエンドの利点は、高速でスムーズな配信プロセスに依存しています。DevOps 文化は、チームが end-to-end 責任を持ってソフトウェアプロジェクトを所有する環境でのみ存続できます。

複数のチームにわたるマイクロフロントエンド開発のオーケストレーション

複数の部門横断的なチームにマイクロフロントエンド開発をスケールすると、2つの問題が発生します。まず、チームはパラダイムの独自の解釈を開発し、フレームワークとライブラリの選択を行い、独自のツールとヘルパーライブラリを作成します。次に、完全自律型チームは、低レベルのインフラストラクチャ管理などの一般的な機能に責任を負う必要があります。したがって、マルチチームマイクロフロントエンド組織に2つのチーム、つまり有効化チームとプラットフォームチームを導入することは理にかなっています。これらの概念は、分散システムを使用する最新のIT組織で広く採用されており、[チームトポロジー](#)で十分に文書化されています。

次の図は、3つのマイクロフロントエンドチームにツール、ライブラリ、標準、テストを提供する有効化チームを示しています。プラットフォームチームは、これら3つのマイクロフロントエンドチームにインフラストラクチャ、共有ランタイム機能、ドメインサービスを提供します。



プラットフォームチームは、マイクロフロントエンドチームを未分化の重労働から解放することでサポートします。このサポートには、コンテナランタイム、CI/CD パイプライン、コラボレーションツール、モニタリングなどのインフラストラクチャサービスが含まれます。ただし、プラットフォームチームを設定すると、開発がオペレーションからデタッチされる組織につながるべきではありません。逆の場合、プラットフォームチームはエンジニアリング製品を提供し、マイクロフロントエンドチームはプラットフォーム上のサービスの所有権とランタイム責任を負います。

有効化チームは、ガバナンスに重点を置き、マイクロフロントエンドチーム全体の一貫性を確保することでサポートを提供します。(プラットフォームチームはこれに関与しないでください)。有効

化チームは UI ライブラリなどの共有リソースを維持し、フレームワークの選択、パフォーマンス予算、相互運用性規則などの標準を作成します。同時に、ガバナンスで定義されている標準とツールの適用に関するトレーニングを新しいチームまたはチームメンバーに提供します。

デプロイ

マイクロフロントエンドチームの自律性の北極星は、他のマイクロフロントエンドチームから独立した本番稼働への道筋を持つ自動パイプラインを持つことです。共有なしの原則に従うチームは、独立したパイプラインを実装できます。ライブラリを共有したり、プラットフォームチームに依存するチームは、デプロイパイプラインの依存関係を管理する方法を決定する必要があります。

通常、各パイプラインは次の処理を行います。

- フロントエンドアセットを構築
- 消費のためにアセットをホスティングにデプロイします
- 新しいバージョンを顧客に配信できるように、レジストリとキャッシュが更新されていることを確認します

実際のパイプラインステップは、テクノロジースタックとページ構成アプローチによって異なります。

クライアント側の構成では、アプリケーションバンドルをホスティングバケットにアップロードし、CDN でのキャッシュを通じて消費にリリースすることを意味します。サービスワーカーでブラウザキャッシュを使用するアプリケーションでは、サービスワーカーキャッシュを更新する方法も実装する必要があります。

サーバー側の構成では、通常、サーバーコンポーネントの新しいバージョンをデプロイし、新しいバージョンを検出できるようにマイクロフロントエンドレジストリを更新することを意味します。Blue/Green または Canary のデプロイパターンを使用して、新しいバージョンを徐々にロールアウトできます。

ガバナンス

通常、複数のペルソナがマイクロフロントエンドで動作し、それぞれが共通のビジネス目標に対して異なる制約の下で動作します。コミュニケーションと人間のコラボレーションは成功の鍵ですが、過度に複雑なプロセスを過剰に伝達して実装すると、開発サイクルが遅くなります。これにより、モラルが低下し、品質バーが低下します。

複数のチームを使用してマイクロフロントエンドを実装する最も成功した企業は、自律性と連携のバランスをとるメカニズムを作成します。これにより、意思決定者はローカルでアクションを実行し、必要な場合にのみ階層的にエスカレーションできます。メカニズムには以下が含まれます。

- [API 契約](#)
- [イベントを使用した相互対話](#)
- [自律性と調整のバランスをとる](#)
- [機能フラグ](#)
- [サービス検出](#)

API 契約

各マイクロフロントエンドは、意見、ロジック、複雑さをカプセル化できるシステムです。クロスカットの懸念には通常、次のようなものがあります。

- システムを設計する – ライブラリとして配布される UIs を開発するためのツール
- コンポジション – マイクロフロントエンドがアプリケーションシェルとやり取りしてレンダリングし、そのコンテキストを継承する方法
- ロジック処理 – 永続状態を処理する APIs とのやり取り
- 他のマイクロフロントエンドとのインタラクティブ性 - イベントの公開と消費、あるマイクロフロントエンドから別のマイクロフロントエンドへの移動などのシナリオ

消費とトラブルシューティングを高速化するには、マイクロフロントエンドの依存関係など、これらのインターフェイスの宣言と文書化方法の標準化に投資するのが一般的です。人間によってキュレーションされた Wiki は良いスタートです。よりスケーラブルなアプローチは、この情報を構造化メタデータとしてコードに保存することです。その後、オートメーションを使用して履歴の変更を追跡し、全文検索を提供することで、使用のために一元化できます。

マイクロフロントエンドに多数のチームが関与する場合は、チーム間で調整する戦略が必要です。API 契約を統一された方法で共有することは、通信のオーバーヘッドを減らし、デベロッパーエクスペリエンスを向上させるため、必須となります。

[OpenAPI](#) は HTTP APIs であり、API インターフェイスと契約を統一された方法で定義することをサポートしています。Amazon APIs Gateway で OpenAPI を使用して REST API を実装できます。

[OpenAPI Amazon API Gateway](#) コンテナや仮想マシンでホストできるさまざまなオープンソースフレームワークを使用することもできます。大きな利点は、OpenAPI が一貫した形式でドキュメントを自動的に生成できるため、複数のチームが最小限の初期投資で知識を共有できることです。

複数のチームがマイクロフロントエンドで作業する場合、多くの場合、グループを形成します。これらのグループでは、全体像について考え、貢献しながら、互いに出会い、学び合うことができます。これらのイニシアチブは通常、所有権の境界を定義して文書化し、カット間の懸念について議論し、一般的な問題を解決するための取り組みの重複を早期に特定します。

イベントを使用した相互対話

シナリオによっては、状態の変化やユーザーアクションに対応するために、複数のマイクロフロントエンドが相互にやり取りする必要がある場合があります。例えば、ページ上の複数のマイクロフロントエンドに折りたたみ可能なメニューを含めることができます。ユーザーがボタンを選択すると、メニューが表示されます。ユーザーが他の場所をクリックすると、メニューは非表示になります。これには、別のマイクロフロントエンド内でレンダリングされる別のメニューも含まれます。

技術的には、Redux などの共有状態ライブラリを複数のマイクロフロントエンドで使用して、シェルで調整できます。ただし、これによりアプリケーション間の結合が大きくなり、コードのテストが難しくなり、レンダリング中のパフォーマンスが低下する可能性があります。

一般的で効果的なアプローチの 1 つは、ライブラリとして配布され、アプリケーションシェルによってオーケストレーションされ、複数のマイクロフロントエンドで使用されるイベントバスを開発することです。このようにして、各マイクロフロントエンドは特定のイベントを非同期的に発行してリスンし、その動作は独自の内部状態のみに基づいて行われます。その後、複数のチームが共有 Wiki ページを維持し、イベントについて説明し、ユーザーエクスペリエンスデザイナーが同意した動作をドキュメント化できます。

イベントバスの実装例では、ドロップダウンコンポーネントは共有バスを使用して、ペイロードが `drop-down-open-menu` のというイベントを発行します `{"id": "homepage-aboutus-button"}`。コンポーネントはリスナーを `drop-down-open-menu` イベントに追加して、イベントが新しい ID に対して発生した場合にドロップダウンコンポーネントがレンダリングされ、折りたた

み可能なセクションが非表示になります。このようにして、マイクロフロントエンドは、パフォーマンスの向上とカプセル化の向上により、変更に対応できるため、複数のチームが動作を設計およびテストしやすくなります。

シンプルさと保守性を向上させるために、最新のブラウザによってネイティブに実装された標準 APIs を使用することをお勧めします。[MDN イベントリファレンス](#)は、クライアント側でレンダリングされたアプリケーションでのイベントの使用に関する情報を提供します。

自律性と調整のバランスをとる

マイクロフロントエンドアーキテクチャは、チームの自律性に強く偏っています。ただし、問題を解決するための柔軟性をサポートできる分野と多様なアプローチを区別し、連携を実現するために標準化が必要な分野を区別することが重要です。シニアリーダーやアーキテクトは、マイクロフロントエンドのセキュリティ、パフォーマンス、運用上の優秀性、信頼性のバランスを取るために、これらの分野を早期に特定し、投資を優先する必要があります。このバランスを見つけるには、マイクロフロントエンドの作成、テスト、リリース、ログ記録、モニタリング、アラートが含まれます。

マイクロフロントエンドの作成

理想的には、エンドユーザーのパフォーマンスの観点からメリットを最大化するために、すべてのチームが強く連携しています。実際には、これは難しく、より多くの労力が必要になる場合があります。複数のチームがオープンで透明性のある議論を通じて貢献できる、いくつかの書面によるガイドラインから始めることをお勧めします。その後、チームは徐々に Cookiecutter ソフトウェアパターンを採用できます。これにより、プロジェクトを足場するための統一された方法を提供するツールの作成がサポートされます。

このアプローチを使用すると、意見や制約を和らげることができます。欠点は、これらのツールの作成とメンテナンスに多大な投資が必要であり、デベロッパーの生産性に影響を与えずにブロッカーに迅速に対処できることです。

マイクロフロントエンドの E nd-to-end テスト

ユニットテストは所有者に任せることができます。独自のシェルで実行されているマイクロフロントエンドをクロステストするための戦略を早期に実装することをお勧めします。この戦略には、本番リリースの前後にアプリケーションをテストする機能が含まれています。重要な機能を手動でテストするには、技術系および技術系以外の人向けのプロセスとドキュメントを作成することをお勧めします。

変更によって機能的なカスタマーエクスペリエンスや機能しないカスタマーエクスペリエンスが損なわれないようにすることが重要です。理想的な戦略は、主要な機能とセキュリティやパフォーマンスなどのアーキテクチャ特性の両方について、自動テストに徐々に投資することです。

マイクロフロントエンドのリリース

各チームには、コードをデプロイし、意見を交換して、独自のインフラストラクチャを構築するための独自の方法があるかもしれません。このようなシステムを維持するための複雑さのコストは、通常、抑止力です。代わりに、に早期投資して、共有ツールで適用できる共有戦略を実装することをお勧めします。

選択した CI/CD プラットフォームを使用してテンプレートを開発します。その後、チームは事前に承認されたテンプレートと共有インフラストラクチャを使用して、変更を本番環境にリリースできます。これらのシステムでは、テストと統合の初期期間後に大幅な更新が必要になることはほとんどないため、この開発作業に早期に投資を開始できます。

ログ記録とモニタリング

各チームは、運用または分析の目的で追跡するビジネスメトリクスとシステムメトリクスを異なるものにすることができます。Cookiecutter ソフトウェアパターンは、ここでも適用できます。イベントの配信は抽象化でき、複数のマイクロフロントエンドが消費できるライブラリとして使用できます。柔軟性のバランスを取り、自律性を提供するには、カスタムメトリクスをログに記録し、カスタムダッシュボードまたはレポートを作成するためのツールを開発します。このレポートにより、製品所有者との緊密なコラボレーションが促進され、エンドユーザーのフィードバックループが短縮されます。

配信を標準化することで、複数のチームが協力してメトリクスを追跡できます。例えば、e コマースウェブサイトでは、「製品の詳細」マイクロフロントエンドから「カート」マイクロフロントエンド、「購入」マイクロフロントエンドまでのユーザージャーニーを追跡して、エンゲージメント、解約、問題を測定することができます。各マイクロフロントエンドが 1 つのライブラリを使用してイベントをログに記録する場合、このデータ全体を消費し、それを包括的に調べて、洞察力のある傾向を特定できます。

アラート

ログ記録やモニタリングと同様に、アラートはある程度の柔軟性のために、標準化の恩恵を受けます。チームが異なれば、機能的アラートと非機能的アラートの反応が異なる場合があります。ただし、すべてのチームが共有プラットフォームで収集および分析されたメトリクスに基づいてアラート

を開始する統合方法を持っている場合、ビジネスはチーム間の問題を特定できます。この機能は、インシデント管理イベント中に便利です。例えば、アラートは次のように開始できます。

- 特定のブラウザバージョンでの JavaScript クライアント側の例外の数の増加
- 特定のしきい値にわたってレンダリングが大幅に低下するまでの時間
- 特定の API を使用する場合の 5xx ステータスコードの数の増加

システムの成熟度に応じて、次の表に示すように、インフラストラクチャのさまざまな部分で労力のバランスをとることができます。

導入	研究と開発	昇順	成熟度
マイクロフロントエンドを作成します。	学習内容を実験、文書化、共有する。	新しいマイクロフロントエンドを足場するためのツールに投資します。導入をエバンジェライズします。	足場用のツールを統合。導入をプッシュします。
マイクロフロントエンドをエンドツーエンドでテストします。	関連するすべてのマイクロフロントエンドを手動でテストするメカニズムを実装します。	セキュリティとパフォーマンスの自動テストのためのツールに投資します。機能フラグとサービス検出を調査します。	サービス検出、本番環境でのテスト、自動 end-to-end テストのためのツールを統合。
マイクロフロントエンドをリリース	共有 CI/CD インフラストラクチャと自動複数環境リリースに投資します。導入	CI/CD インフラストラクチャのツールを統合する手動ロールバックメカニズムを実装します。導入をプッシュします。	システムおよびビジネスメトリクスとアラートに基づいて自動ロールバックを開始するメカニズムを作成します。

導入	研究と開発	昇順	成熟度
スリム す。	をエバンジェラ イズします。		
マイク ロフ ントエ ンド のパ フォー マン スを確 認しま す。	システムイベン トとビジネスイ ベントの一貫し たログ記録のた めに、共有モニ タリングインフ ラストラクチャ とライブラリに 投資します。	モニタリングとアラート のためのツールを統合し ます。チーム間のダッシュ ボードを実装して、全般的 な状態をモニタリングし、 インシデント管理を改善し ます。	ログ記録スキーマを標準化します。 コストに合わせて最適化します。複 雑なビジネスメトリクスに基づいて アラートを実装します。

機能フラグ

機能フラグをマイクロフロントエンドに実装することで、複数の環境で機能のテストとリリースを簡単に調整できます。機能フラグ手法は、ブールベースのストアで決定を一元化し、それに基づいて動作を駆動することで構成されます。多くの場合、特定の時点まで非表示にできる変更をサイレントに伝達し、そうしないとブロックされる新機能の新しいリリースをロック解除して、チームの速度を低下させるために使用されます。

特定の日に起動されるマイクロフロントエンド機能に取り組むチームの例を考えてみましょう。この機能は準備はできましたが、個別にリリースされる別のマイクロフロントエンドでの変更とともにリリースする必要があります。両方のマイクロフロントエンドのリリースをブロックすると、アンチパターンと見なされ、デプロイ時にリスクが高くなります。

代わりに、チームはレンダリング時間 (共有 Feature Flags API への HTTP 呼び出しなど) に消費するデータベースにブール型機能フラグを作成できます。チームは、ブール値がに設定されているテスト環境で変更をリリースTrueして、本番稼働環境に起動する前にプロジェクト間の機能要件と非機能要件を検証することもできます。

機能フラグのもう 1 つの使用例は、QueryStringパラメータを使用して特定の値を設定するか、特定のテスト文字列を Cookie に保存することで、フラグの値を上書きするメカニズムを実装することです。製品所有者は、他の機能のリリースやバグ修正をリリース日までブロックすることなく、機能を反復処理できます。特定の日付に、データベースのフラグ値を変更すると、チーム間で調整され

たりリリースを必要とせずに、変更が本番環境で即座に表示されます。機能がリリースされると、開発チームはコードをクリーンアップして古い動作を削除します。

その他のユースケースには、コンテキストベースの機能フラグシステムのリリースが含まれます。例えば、1つのウェブサイトが複数の言語で顧客にサービスを提供している場合、この機能は特定の国の訪問者にのみ利用できる場合があります。機能フラグシステムは、国コンテキストを送信する消費者に依存することができ (HTTP Accept-Language ヘッダーを使用するなど)、そのコンテキストに応じて動作が異なる場合があります。

機能フラグはデベロッパーと製品所有者間のコラボレーションを容易にする強力なツールですが、コードベースの大幅な低下を避けるために、人々の注意が必要です。複数の機能でフラグをアクティブにしておくと、問題のトラブルシューティング時に複雑さが増し、JavaScript バンドルサイズが増加し、最終的には技術的負債が蓄積される可能性があります。一般的な緩和アクティビティには以下が含まれます。

- フラグの背後にある各機能をユニットテストしてバグの可能性を減らすことで、テストを実行する自動 CI/CD パイプラインに長いフィードバックループを導入できます。
- コード変更中のバンドルサイズの増加を測定するツールの作成。コードレビュー中に緩和できます。

AWS は、Amazon CloudFront 関数または Lambda@Edge を使用してエッジでの A/B テストを最適化するためのさまざまなソリューションを提供します。これらのアプローチは、仮定をアサートするために使用しているソリューションまたは既存の SaaS 製品を統合する複雑さを軽減するのに役立ちます。詳細については、[「A/B テスト」](#)を参照してください。

サービス検出

フロントエンド検出パターンは、マイクロフロントエンドの開発、テスト、提供における開発エクスペリエンスを向上させます。このパターンでは、マイクロフロントエンドのエントリーポイントを記述する共有可能な設定を使用します。共有可能な設定には、Canary リリースを使用して各環境で安全にデプロイするために使用される追加のメタデータも含まれています。

最新のフロントエンド開発には、開発中のモジュール性をサポートするために、さまざまなツールとライブラリを使用する必要があります。従来、このプロセスは、初期ロード (アプリがブラウザで開いたとき) や使用状況 (顧客がボタンの選択や情報の挿入などのアクションを実行するとき) など、実行時にネットワーク呼び出しを最小限に抑えることを目的として、CDN でホストできる個々のファイルにコードをバンドルすることで構成されていました。

バンドルの分割

マイクロフロントエンドアーキテクチャは、多数の機能を個別にバンドルすることで生成された非常に大きなバンドルによって発生するパフォーマンスの問題を解決します。例えば、非常に大規模な e コマースウェブサイトでも 6 MB の JavaScript ファイルにバンドルできます。圧縮にもかかわらず、そのファイルのサイズは、アプリをロードし、エッジ最適化 CDN からファイルをダウンロードする際のユーザーのエクスペリエンスに悪影響を及ぼす可能性があります。

アプリケーションをホームページ、製品の詳細、カートのマイクロフロントエンドに分割する場合、バンドルメカニズムを使用して 3 つの個別の 2 MB バンドルを生成できます。この変更により、ユーザーがホームページを使用すると、最初のロードのパフォーマンスが 300% 向上する可能性があります。製品またはカートのマイクロフロントエンドバンドルは、ユーザーがアイテムの製品ページにアクセスして購入を決定した場合にのみ非同期的にロードされます。

このアプローチに基づいて多くのフレームワークとライブラリが利用でき、顧客とデベロッパーの両方に利点があります。コード内の依存関係の分離につながる可能性のあるビジネスの境界を特定するには、さまざまなビジネス機能を複数のチームにマッピングできます。分散所有権は、独立性と俊敏性をもたらします。

ビルドパッケージを分割する場合、設定を使用してマイクロフロントエンドをマッピングし、初期ロードとロード後のナビゲーションのオーケストレーションを駆動できます。その後、ビルド時ではなくランタイム時に設定を使用できます。例えば、クライアント側のフロントエンドコードまたはサーバー側のバックエンドコードは、API への最初のネットワーク呼び出しを実行して、マイクロフロントエンドのリストを動的に取得できます。また、構成と統合に必要なメタデータも取得します。信頼性とパフォーマンスのためにフェイルオーバー戦略とキャッシュを設定できます。マイクロフロントエンドをマッピングすると、シエルアプリケーションによってオーケストレーションされた以前にデプロイされたマイクロフロントエンドによって、マイクロフロントエンドの個々のデプロイを検出できるようになります。

Canary リリース

Canary リリースは、マイクロサービスをデプロイするための確立された一般的なパターンです。Canary は、リリースのターゲットユーザーを複数のグループにバケット化し、即時の置き換え (ブルー/グリーンデプロイとも呼ばれます) ではなく、徐々に変更をリリースします。Canary リリース戦略の例は、ターゲットユーザーの 10% に新しい変更をロールアウトし、1 分ごとに 10% を追加し、合計時間が 10 分で 100% に達することです。

Canary リリースの目的は、変更に関するフィードバックを早期に取得し、システムをモニタリングして問題の影響を軽減することです。自動化が行われると、ビジネスメトリクスまたはシステムメ

リクスを内部システムでモニタリングし、デプロイを停止したり、ロールバックを開始したりできます。

例えば、変更によって、リリースの最初の数分間に収益が失われたり、パフォーマンスが低下したりするバグが発生する可能性があります。自動モニタリングはアラームを開始できます。サービス検出パターンでは、このアラームはデプロイを停止してすぐにロールバックでき、100%ではなく20%のユーザーのみに影響します。ビジネスには、問題の範囲を縮小することでメリットがあります。

ストレージとして DynamoDB を使用して REST 管理 API を実装するアーキテクチャの例については、の [「AWS でのフロントエンドサービス検出」ソリューション](#) を参照してください GitHub。テンプレートを使用して AWS CloudFormation、アーキテクチャを独自の CI/CD パイプラインに統合します。このソリューションには、ソリューションをフロントエンドアプリケーションと統合するための REST コンシューマー API が含まれています。

プラットフォームチームが必要ですか？

一部の企業には、マイクロフロントエンドに取り組むために他のチームによって採用されるコード、インフラストラクチャ、プロセスを所有および維持する責任を持つチームがあります。一般的な責任には以下が含まれます。

- マイクロフロントエンドを含むリポジトリで使用できる CI/CD パイプラインを作成して維持します。コード変更を構築してテストし、複数の環境でリリースします。
- 問題に対応するために、共有ダッシュボード、アラートメカニズム、システムなどのオブザーバビリティ関連のツールを作成して維持します。
- イベント処理、共有サービスの使用、およびサードパーティーの依存関係のための共有ライブラリを作成して維持します。
- システムのパフォーマンス、セキュリティ、信頼性など、機能以外の品質を継続的にモニタリングするツールを作成および維持します。
- 設計システムを作成して維持します。
- マイクロフロントエンドシステムのアプリケーションシェルを作成、保守、サポートします。

プロジェクトの規模に応じて、次のいずれかのアプローチを使用して、これらの責任を管理できます。

- 共有ツールを扱う唯一の責任を持つ専用のプラットフォームチームを作成します。
- 複数のチームのメンバーで構成されるグループを作成します。グループメンバーは、マイクロフロントエンドでの作業と、共有ツールでの作業の時間を分割します。これはトラチームとも呼ばれます。

タイガーチームアプローチは顧客中心の効果的な方法ですが、プロジェクトが推進力と責任を獲得すれば、タイガーチームはプラットフォームチームに進化することがよくあります。プラットフォームチームとタイガーチームの両方で、マイクロフロントエンドに取り組む最も成功した企業がこれらのチームを形成し、複数のバックグラウンドとスキルを持つ複数の人が貢献できるようにします。チームメンバーには、バックエンドエンジニア、フロントエンドエンジニア、ユーザーエクスペリエンス (UX) デザイナー、テクニカルプロダクトマネージャーが含まれる場合があります。この多様性により、人々はシンプルさを念頭に置いて、健全な議論や設計に継続的に取り組むことができます。

次のステップ

このガイドでは、アーキテクチャと組織のパターン、主要な意思決定のトレードオフ、マイクロフロントエンドに関連するガバナンスの懸念について説明しました。表は、このドキュメントで説明されているプラクティスのトレードオフを以下のディメンションの観点からまとめたものです。

- **自律性** – 各マイクロフロントエンドチームが実装とリリースをエンドユーザーに個別に進化させる能力。
- **一貫性** - 各マイクロフロントエンドが期待どおりに動作するアプリケーションの全体的なエクスペリエンス。一貫性が高いということは、マイクロフロントエンドがアプリケーションの他の部分と一貫性があり、アプリケーション全体のユーザーエクスペリエンスに悪影響を及ぼさないことを意味します。
- **複雑さ** – マイクロフロントエンド、アプリケーション全体、ガバナンスコントロールの実装とテストに必要なインフラストラクチャ、コード、労力の量。

練習	自律性	整合性	複雑さ
モノリシックアプリケーションではなくマイクロフロントエンドで構築する	高	中程度	高い

コード共有のプラクティス	自律性	整合性	複雑さ
何も共有しない	高い	低	低
カット間の懸念を共有する	中程度	高	中程度
ビジネスロジックを共有する	低	高	中程度
ビルド時にライブラリを通じて共有する	中程度	高い	低
実行時に共有する	高い	高い	高い

マイクロフロントエンド検出プラクティス	自律性	整合性	複雑さ
アプリケーション構築中に設定する	低	高い	低
サーバー側の検出	高い	高	中程度
クライアント側 (ランタイム) 検出	高い	高	中程度
コンポジションプラクティスを表示する	自律性	整合性	複雑さ
サーバー	高	中程度	高い

コンポーザブル	自律性	整合性	複雑さ
コンポーザブル			
エッジ	中程度	中程度	高い
クライアント	高	中	中程度

このガイドで導入された概念の詳細については、[「リソース」](#)セクションを参照してください。

リソース

- [コンテキスト内のマイクロフロントエンド](#)
- [ドメイン駆動型設計](#)
- [EDA ビジュアル](#)
- [フロントエンド検出](#)
- [でのフロントエンドサービス検出 AWS](#)
- [アジャイルマニフェスト](#)
- [MDN イベントリファレンス](#)
- [OpenAPI](#)

寄稿者

以下の個人がこのガイドに貢献しました。

- プリンシパルソリューションアーキテクト、Matteo MCU AWS
- Alexander Guensche、シニアソリューションアーキテクト、AWS
- Harun Hasdal、シニアソリューションアーキテクト、AWS
- Luca Mezzalira、プリンシパル Go to Market Specialist Solutions Architect Serverless UK、AWS

ドキュメント履歴

以下の表は、本ガイドの重要な変更点について説明したものです。今後の更新に関する通知を受け取る場合は、[RSS フィード](#) をサブスクライブできます。

変更	説明	日付
初版発行	—	2024 年 7 月 12 日

AWS 規範ガイド用語集

以下は、AWS 規範ガイドが提供する戦略、ガイド、パターンで一般的に使用される用語です。エントリを提案するには、用語集の最後のフィードバックの提供リンクを使用します。

数字

7 Rs

アプリケーションをクラウドに移行するための 7 つの一般的な移行戦略。これらの戦略は、ガートナーが 2011 年に特定した 5 Rs に基づいて構築され、以下で構成されています。

- リファクタリング/アーキテクチャの再設計 — クラウドネイティブ特徴を最大限に活用して、俊敏性、パフォーマンス、スケーラビリティを向上させ、アプリケーションを移動させ、アーキテクチャを変更します。これには、通常、オペレーティングシステムとデータベースの移植が含まれます。例: オンプレミスの Oracle データベースを Amazon Aurora PostgreSQL 互換エディションに移行します。
- リプラットフォーム (リフトアンドリシェイプ) – アプリケーションをクラウドに移行し、クラウド機能を活用するためある程度の最適化を導入します。例: オンプレミスの Oracle データベースをの Oracle 用 Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) に移行します AWS クラウド。
- 再購入 (ドロップアンドショップ) — 通常、従来のライセンスから SaaS モデルに移行して、別の製品に切り替えます。例: 顧客関係管理 (CRM) システムを Salesforce.com に移行します。
- リホスト (リフトアンドシフト) — クラウド機能を活用するための変更を加えずに、アプリケーションをクラウドに移行します。例: オンプレミスの Oracle データベースをの EC2 インスタンスで Oracle に移行します AWS クラウド。
- 再配置 (ハイパーバイザーレベルのリフトアンドシフト) – 新しいハードウェアを購入したり、アプリケーションを書き換えたり、既存の運用を変更したりすることなく、インフラストラクチャをクラウドに移行できます。サーバーをオンプレミスプラットフォームから同じプラットフォームのクラウドサービスに移行します。例: を移行する Microsoft Hyper-V へのアプリケーション AWS。
- 保持 (再アクセス) — アプリケーションをお客様のソース環境で保持します。これには、主要なリファクタリングを必要とするアプリケーションや、お客様がその作業を後日まで延期したいアプリケーション、およびそれらを行き移るためのビジネス上の正当性がないため、お客様が保持するレガシーアプリケーションなどがあります。
- 使用停止 — お客様のソース環境で不要になったアプリケーションを停止または削除します。

A

ABAC

[属性ベースのアクセスコントロール](#) を参照してください。

抽象化されたサービス

「[マネージドサービス](#)」を参照してください。

ACID

[原子性、一貫性、分離、耐久性](#) を参照してください。

アクティブ - アクティブ移行

(双方向レプリケーションツールまたは二重書き込み操作を使用して) ソースデータベースとターゲットデータベースを同期させ、移行中に両方のデータベースが接続アプリケーションからのトランザクションを処理するデータベース移行方法。この方法では、1 回限りのカットオーバーの必要がなく、管理された小規模なバッチで移行できます。柔軟性がありますが、[アクティブ/パッシブ移行](#)よりも多くの作業が必要です。

アクティブ - パッシブ移行

ソースデータベースとターゲットデータベースを同期させながら、データがターゲットデータベースにレプリケートされている間、接続しているアプリケーションからのトランザクションをソースデータベースのみで処理するデータベース移行の方法。移行中、ターゲットデータベースはトランザクションを受け付けません。

集計関数

行のグループで動作し、グループの単一の戻り値を計算SQLします。集計関数の例には、SUMおよびMAXが含まれます。

AI

[人工知能](#) を参照してください。

AIOps

[人工知能オペレーション](#) を参照してください。

匿名化

データセット内の個人情報を完全に削除するプロセス。匿名化は個人のプライバシー保護に役立ちます。匿名化されたデータは、もはや個人データとは見なされません。

アンチパターン

繰り返し起こる問題に対して頻繁に用いられる解決策で、その解決策が逆効果であったり、効果がなかったり、代替案よりも効果が低かったりするもの。

アプリケーションコントロール

マルウェアからシステムを保護するために、承認されたアプリケーションのみを使用できるようにするセキュリティアプローチ。

アプリケーションポートフォリオ

アプリケーションの構築と維持にかかるコスト、およびそのビジネス価値を含む、組織が使用する各アプリケーションに関する詳細情報の集まり。この情報は、[ポートフォリオの検出と分析プロセス](#)の需要要素であり、移行、モダナイズ、最適化するアプリケーションを特定し、優先順位を付けるのに役立ちます。

人工知能 (AI)

コンピューティングテクノロジーを使用し、学習、問題の解決、パターンの認識など、通常は人間に関連づけられる認知機能の実行に特化したコンピュータサイエンスの分野。詳細については、「[人工知能 \(AI\) とは何ですか?](#)」を参照してください。

人工知能オペレーション (AIOps)

機械学習技術を使用して運用上の問題を解決し、運用上のインシデントと人の介入を減らし、サービス品質を向上させるプロセス。移行戦略で AWS がどのように AIOps 使用されるかの詳細については、「[オペレーション統合ガイド](#)」を参照してください。

非対称暗号化

暗号化用のパブリックキーと復号用のプライベートキーから成る 1 組のキーを使用した、暗号化のアルゴリズム。パブリックキーは復号には使用されないため共有しても問題ありませんが、プライベートキーの利用は厳しく制限する必要があります。

原子性、一貫性、分離、耐久性 (ACID)

エラー、停電、その他の問題が発生した場合でも、データベースのデータ有効性と運用上の信頼性を保証する一連のソフトウェアプロパティ。

属性ベースのアクセスコントロール (ABAC)

部署、役職、チーム名など、ユーザーの属性に基づいてアクセス許可をきめ細かく設定する方法。詳細については、AWS Identity and Access Management (IAM) ドキュメントの[ABAC 「」の AWS 「」](#)を参照してください。

信頼できるデータソース

最も信頼性のある情報源とされるデータのプライマリーバージョンを保存する場所。匿名化、編集、仮名化など、データを処理または変更する目的で、信頼できるデータソースから他の場所にデータをコピーすることができます。

アベイラビリティゾーン

他のアベイラビリティゾーンの障害から AWS リージョン 隔離され、同じリージョン内の他のアベイラビリティゾーンへの安価で低レイテンシーのネットワーク接続を提供する 内の別の場所。

AWS クラウド導入フレームワーク (AWS CAF)

組織がクラウドへの移行を成功させるための効率的かつ効果的な計画を策定 AWS するのに役立つ、のガイドラインとベストプラクティスのフレームワークです。AWS CAF は、ビジネス、人材、ガバナンス、プラットフォーム、セキュリティ、運用という 6 つの重点分野にガイダンスをまとめています。ビジネス、人材、ガバナンスの観点では、ビジネススキルとプロセスに重点を置き、プラットフォーム、セキュリティ、オペレーションの視点は技術的なスキルとプロセスに焦点を当てています。例えば、人材の観点では、人事 (HR)、人材派遣機能、および人材管理を扱うステークホルダーを対象としています。この観点から、AWS CAFは、クラウド導入を成功させるための準備に役立つ人材開発、トレーニング、コミュニケーションに関するガイダンスを提供します。詳細については、[AWS CAFウェブサイト](#)と[AWS CAFホワイトペーパー](#)を参照してください。

AWS ワークロード認定フレームワーク (AWS WQF)

データベース移行ワークロードを評価し、移行戦略を推奨し、作業見積もりを提供するツール。AWS WQF は AWS Schema Conversion Tool (AWS SCT) に含まれています。データベーススキーマとコードオブジェクト、アプリケーションコード、依存関係、およびパフォーマンス特性を分析し、評価レポートを提供します。

B

不正なボット

個人または組織に混乱または害を与えることを目的とした[ボット](#)。

BCP

[事業継続計画](#) を参照してください。

動作グラフ

リソースの動作とインタラクションを経時的に示した、一元的なインタラクティブビュー。Amazon Detective で動作グラフを使用して、失敗したログオン試行、疑わしいAPI呼び出し、および同様のアクションを調べることができます。詳細については、Detective ドキュメントの [Data in a behavior graph](#) を参照してください。

ビッグエンディアンシステム

最上位バイトを最初に格納するシステム。 [「endianness」](#) も参照してください。

二項分類

バイナリ結果 (2 つの可能なクラスのうちの一つ) を予測するプロセス。例えば、お客様の機械学習モデルで「この E メールはスパムですか、それともスパムではありませんか」などの問題を予測する必要があるかもしれません。または「この製品は書籍ですか、車ですか」などの問題を予測する必要があるかもしれません。

ブルームフィルター

要素がセットのメンバーであるかどうかをテストするために使用される、確率的でメモリ効率の高いデータ構造。

ブルー/グリーンデプロイ

2 つの別々の環境を作成するデプロイ戦略。現在のアプリケーションバージョンは 1 つの環境 (青) で実行し、新しいアプリケーションバージョンは他の環境 (緑) で実行します。この戦略は、最小限の影響で迅速にロールバックするのに役立ちます。

ポット

インターネット経由で自動タスクを実行し、人間のアクティビティやインタラクションをシミュレートするソフトウェアアプリケーション。インターネット上の情報をインデックス化するウェブクローラーなど、一部のポットは有用または有益です。悪質なポットと呼ばれる他のポットの中には、個人や組織に混乱や害を与えることを意図したものもあります。

ポットネット

[マルウェア](#) に感染し、[ポット](#) ハーダーまたはポットオペレーターと呼ばれる 1 つの当事者によって制御されているポットのネットワーク。ポットネットは、ポットとその影響をスケールするための最もよく知られているメカニズムです。

ブランチ

コードリポジトリに含まれる領域。リポジトリに最初に作成するブランチは、メインブランチといます。既存のブランチから新しいブランチを作成し、その新しいブランチで機能を開発した

り、バグを修正したりできます。機能を構築するために作成するブランチは、通常、機能ブランチと呼ばれます。機能をリリースする準備ができたなら、機能ブランチをメインブランチに統合します。詳細については、[「ブランチについて」](#) (GitHub ドキュメント) を参照してください。

ブレイクグラスアクセス

例外的な状況では、承認されたプロセスを通じて、ユーザーが AWS アカウント 通常アクセス許可を持たないにアクセスするための簡単な手段を提供します。詳細については、Well-Architected [ガイド](#) の「[ブレイクグラス手順の実装](#)」インジケータを参照してください。

AWS

ブラウンフィールド戦略

環境の既存インフラストラクチャ。システムアーキテクチャにブラウンフィールド戦略を導入する場合、現在のシステムとインフラストラクチャの制約に基づいてアーキテクチャを設計します。既存のインフラストラクチャを拡張している場合は、ブラウンフィールド戦略と[グリーンフィールド](#)戦略を融合させることもできます。

バッファキャッシュ

アクセス頻度が最も高いデータが保存されるメモリ領域。

ビジネス能力

価値を生み出すためにビジネスが行うこと (営業、カスタマーサービス、マーケティングなど)。マイクロサービスのアーキテクチャと開発の決定は、ビジネス能力によって推進できます。詳細については、ホワイトペーパー [AWSでのコンテナ化されたマイクロサービスの実行](#) の [ビジネス機能を中心に組織化](#) セクションを参照してください。

事業継続計画 (BCP)

大規模移行など、中断を伴うイベントが運用に与える潜在的な影響に対処し、ビジネスを迅速に再開できるようにする計画。

C

CAF

[AWS Cloud Adoption Framework](#) を参照してください。

Canary のデプロイ

エンドユーザーへのバージョンのスローリリースと増分リリース。自信が持てば、新しいバージョンをデプロイし、現在のバージョン全体を置き換えます。

CCoE

[Cloud Center of Excellence](#) を参照してください。

CDC

[データキャプチャの変更](#) を参照してください。

データキャプチャの変更 (CDC)

データソース (データベーステーブルなど) の変更を追跡し、その変更に関するメタデータを記録するプロセス。は、同期を維持するために、ターゲットシステムの変更を監査したりレプリケートしたりするなど、CDCさまざまな目的で使用できます。

カオスエンジニアリング

障害や破壊的なイベントを意図的に導入して、システムの耐障害性をテストします。[AWS Fault Injection Service \(AWS FIS \)](#) を使用して、AWS ワークロードに負荷をかけ、そのレスポンスを評価する実験を実行できます。

CI/CD

[継続的統合と継続的配信](#) を参照してください。

分類

予測を生成するのに役立つ分類プロセス。分類問題の機械学習モデルは、離散値を予測します。離散値は、常に互いに区別されます。例えば、モデルがイメージ内に車があるかどうかを評価する必要がある場合があります。

クライアント側の暗号化

ターゲットが AWS のサービス 受信する前に、データをローカルで暗号化します。

Cloud Center of Excellence (CCoE)

クラウドのベストプラクティスの作成、リソースの移動、移行のタイムラインの確立、大規模変革を通じて組織をリードするなど、組織全体のクラウド導入の取り組みを推進する学際的なチーム。詳細については、AWS クラウド エンタープライズ戦略ブログの[CCoE投稿](#)を参照してください。

クラウドコンピューティング

リモートデータストレージと IoT デバイス管理に通常使用されるクラウドテクノロジー。クラウドコンピューティングは、一般的に[エッジコンピューティング](#)テクノロジーに接続されています。

クラウド運用モデル

IT 組織において、1 つ以上のクラウド環境を構築、成熟、最適化するために使用される運用モデル。詳細については、[「クラウド運用モデルの構築」](#) を参照してください。

導入のクラウドステージ

組織が に移行するときに通常実行する 4 つのフェーズ AWS クラウド :

- プロジェクト — 概念実証と学習を目的として、クラウド関連のプロジェクトをいくつか実行する
- 基盤 — クラウド導入を拡大するための基盤投資 (ランディングゾーンの作成、 の定義CCoE、オペレーションモデルの確立など)
- 移行 — 個々のアプリケーションの移行
- 再発明 — 製品とサービスの最適化、クラウドでのイノベーション

これらのステージは、AWS クラウド エンタープライズ戦略ブログのブログ記事 [「クラウドファーストへのジャーニー」](#) と [「導入のステージ」](#) で、Stephen Orban によって定義されました。AWS 移行戦略との関連性については、[「移行準備ガイド」](#) を参照してください。

CMDB

[設定管理データベース](#) を参照してください。

コードリポジトリ

ソースコードやその他の資産 (ドキュメント、サンプル、スクリプトなど) が保存され、バージョン管理プロセスを通じて更新される場所。一般的なクラウドリポジトリには、GitHub または が含まれます AWS CodeCommit。コードの各バージョンはブランチと呼ばれます。マイクロサービスの構造では、各リポジトリは 1 つの機能専用です。1 つの CI/CD パイプラインで複数のリポジトリを使用できます。

コールドキャッシュ

空である、または、かなり空きがある、もしくは、古いデータや無関係なデータが含まれているバッファキャッシュ。データベースインスタンスはメインメモリまたはディスクから読み取る必要があり、バッファキャッシュから読み取るよりも時間がかかるため、パフォーマンスに影響します。

コールドデータ

めったにアクセスされず、通常は過去のデータです。この種類のデータをクエリする場合、通常は低速なクエリでも問題ありません。このデータを低パフォーマンスで安価なストレージ階層またはクラスに移動すると、コストを削減することができます。

コンピュータビジョン (CV)

機械学習を使用して、デジタル画像や動画などのビジュアル形式から情報を分析および抽出する [AI](#) の分野。例えば、はオンプレミスのカメラネットワークに CV を追加するデバイス AWS Panorama を提供し、Amazon SageMaker は CV の画像処理アルゴリズムを提供します。

設定ドリフト

ワークロードの場合、設定は想定された状態から変更されます。ワークロードが非準拠になる可能性があり、通常は段階的で意図しないものです。

設定管理データベース (CMDB)

データベースとその IT 環境 (ハードウェアとソフトウェアの両方のコンポーネントとその設定を含む) に関する情報を保存、管理するリポジトリ。通常、移行の CMDB ポートフォリオ検出および分析段階でのデータを使用します。

パフォーマンスパック

コンプライアンスとセキュリティチェックをカスタマイズするためにアセンブルできる AWS Config ルールと修復アクションのコレクション。YAML テンプレートを使用して、パフォーマンスパックを AWS アカウント および リージョン、または組織全体に単一のエンティティとしてデプロイできます。詳細については、AWS Config ドキュメントの [「パフォーマンスパック」](#) を参照してください。

継続的インテグレーションと継続的デリバリー (CI/CD)

ソフトウェアリリースプロセスのソース、ビルド、テスト、ステージング、本番の各ステージを自動化するプロセス。CI/CD は一般的にパイプラインと呼ばれます。プロセスの自動化、生産性の向上、コード品質の向上、配信の加速化を可能にします。詳細については、[「継続的デリバリーの利点」](#) を参照してください。CD は継続的デプロイ (Continuous Deployment) の略語でもあります。詳細については [「継続的デリバリーと継続的なデプロイ」](#) を参照してください。

CV

[「コンピュータビジョン」](#) を参照してください。

D

保管中のデータ

ストレージ内にあるデータなど、常に自社のネットワーク内にあるデータ。

データ分類

ネットワーク内のデータを重要度と機密性に基づいて識別、分類するプロセス。データに適した保護および保持のコントロールを判断する際に役立つため、あらゆるサイバーセキュリティのリスク管理戦略において重要な要素です。データ分類は、AWS Well-Architected フレームワークのセキュリティ柱のコンポーネントです。詳細については、[データ分類](#)を参照してください。

データドリフト

実稼働データと ML モデルのトレーニングに使用されたデータとの間に有意な差異が生じたり、入力データが時間の経過と共に有意に変化したりすることです。データドリフトは、ML モデル予測の全体的な品質、精度、公平性を低下させる可能性があります。

転送中のデータ

ネットワーク内 (ネットワークリソース間など) を活発に移動するデータ。

データメッシュ

一元的な管理とガバナンスで分散された分散データ所有権を提供するアーキテクチャフレームワーク。

データ最小化

厳密に必要なデータのみを収集し、処理するという原則。データ最小化を実践 AWS クラウドすることで、プライバシーリスク、コスト、分析のカーボンフットプリントを削減できます。

データ境界

AWS 環境内の一連の予防ガードレール。信頼された ID のみが、期待されるネットワークから信頼されたリソースにアクセスできるようにします。詳細については、「[でデータ境界を構築する AWS](#)」を参照してください。

データの前処理

raw データをお客様の機械学習モデルで簡単に解析できる形式に変換すること。データの前処理とは、特定の列または行を削除して、欠落している、矛盾している、または重複する値に対処することを意味します。

データ出所

データの生成、送信、保存の方法など、データのライフサイクル全体を通じてデータの出所と履歴を追跡するプロセス。

データ件名

データを収集、処理している個人。

データウェアハウス

分析などのビジネスインテリジェンスをサポートするデータ管理システム。データウェアハウスには、通常、大量の履歴データが含まれ、クエリや分析に使用されます。

データベース定義言語 (DDL)

データベース内のテーブルやオブジェクトの構造を作成または変更するためのステートメントまたはコマンド。

データベース操作言語 (DML)

データベース内の情報を変更 (挿入、更新、削除) するためのステートメントまたはコマンド。

DDL

[データベース定義言語](#) を参照してください。

ディープアンサンブル

予測のために複数の深層学習モデルを組み合わせる。ディープアンサンブルを使用して、より正確な予測を取得したり、予測の不確実性を推定したりできます。

ディープラーニング

人工ニューラルネットワークの複数層を使用して、入力データと対象のターゲット変数の間のマッピングを識別する機械学習サブフィールド。

defense-in-depth

一連のセキュリティメカニズムとコントロールをコンピュータネットワーク全体に層状に重ねて、ネットワークとその内部にあるデータの機密性、整合性、可用性を保護する情報セキュリティの手法。この戦略をに採用する場合 AWS、リソースの保護に役立つように、AWS Organizations 構造のさまざまなレイヤーに複数のコントロールを追加します。例えば、defense-in-depth アプローチでは、多要素認証、ネットワークセグメンテーション、暗号化を組み合わせることができます。

委任管理者

では AWS Organizations、互換性のあるサービスが AWS メンバーアカウントを登録して組織のアカウントを管理し、そのサービスのアクセス許可を管理できます。このアカウントを、そのサービスの委任管理者と呼びます。詳細、および互換性のあるサービスの一覧は、AWS Organizations ドキュメントの[AWS Organizations で使用できるサービス](#)を参照してください。

デプロイメント

アプリケーション、新機能、コードの修正をターゲットの環境で利用できるようにするプロセス。デプロイでは、コードベースに変更を施した後、アプリケーションの環境でそのコードベースを構築して実行します。

開発環境

[環境](#) を参照してください。

検出管理

イベントが発生したときに、検出、ログ記録、警告を行うように設計されたセキュリティコントロール。これらのコントロールは副次的な防衛手段であり、実行中の予防的コントロールをすり抜けたセキュリティイベントをユーザーに警告します。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Detective controls](#)を参照してください。

開発バリューストリームマッピング (DVSM)

ソフトウェア開発ライフサイクルのスピードと品質に悪影響を及ぼす制約を特定し、優先順位を付けるために使用されるプロセス。DVSMは、リーンな製造プラクティス用に最初に設計されたバリューストリームマッピングプロセスを拡張します。ソフトウェア開発プロセスを通じて価値を創造し、動かすために必要なステップとチームに焦点を当てています。

デジタルツイン

建物、工場、産業機器、生産ラインなど、現実世界のシステムを仮想的に表現したものです。デジタルツインは、予知保全、リモートモニタリング、生産最適化をサポートします。

ディメンションテーブル

[スタースキーマ](#)では、ファクトテーブル内の量的データに関するデータ属性を含む小さなテーブル。ディメンションテーブル属性は通常、テキストフィールドまたはテキストのように動作する離散番号です。これらの属性は、クエリの制約、フィルタリング、結果セットのラベル付けに一般的に使用されます。

ディザスタ

ワークロードまたはシステムが、導入されている主要な場所でのビジネス目標の達成を妨げるイベント。これらのイベントは、自然災害、技術的障害、または意図しない設定ミスやマルウェア攻撃などの人間の行動の結果である場合があります。

ディザスタリカバリ (DR)

[災害によるダウンタイムとデータ損失を最小限に抑えるために使用する戦略とプロセス](#)。詳細については、「[Well-Architected フレームワーク](#)」の「[でのワークロードのディザスタリカバリ](#)」[AWS: クラウドでのリカバリ](#)」を参照してください。AWS

DML

[データベース操作言語](#) を参照してください。

ドメイン駆動型設計

各コンポーネントが提供している変化を続けるドメイン、またはコアビジネス目標にコンポーネントを接続して、複雑なソフトウェアシステムを開発するアプローチ。この概念は、エリック・エヴァンスの著書、Domain-Driven Design: Tackling Complexity in the Heart of Software (ドメイン駆動設計:ソフトウェアの中心における複雑さへの取り組み) で紹介されています (ポストン: Addison-Wesley Professional、2003)。ストラングラーの fig パターンでドメイン駆動設計を使用する方法については、「[従来の Microsoft のモダナイズ](#)」を参照してくださいASP。NET (ASMX) コンテナと Amazon API Gateway を使用してウェブサービスを段階的に更新する「」。

DR

[「ディザスタリカバリ」](#) を参照してください。

ドリフト検出

ベースライン設定からの偏差の追跡。例えば、AWS CloudFormation を使用して[システムリソースのドリフトを検出](#)したり、を使用して AWS Control Tower、ガバナンス要件のコンプライアンスに影響を与える[ランディングゾーンの変化を検出](#)したりできます。

DVSM

[「開発値ストリームマッピング」](#) を参照してください。

E

EDA

[「探索的データ分析」](#) を参照してください。

エッジコンピューティング

IoT ネットワークのエッジにあるスマートデバイスの計算能力を高めるテクノロジー。[クラウドコンピューティング](#) と比較すると、エッジコンピューティングは通信レイテンシーを短縮し、レスポンス時間を向上させることができます。

暗号化

人間が読み取り可能なプレーンテキストデータを暗号文に変換するコンピューティングプロセス。

暗号化キー

暗号化アルゴリズムが生成した、ランダム化されたビットからなる暗号文字列。キーの長さは決まっておらず、各キーは予測できないように、一意になるように設計されています。

エンディアン

コンピュータメモリにバイトが格納される順序。ビッグエンディアンシステムでは、最上位バイトが最初に格納されます。リトルエンディアンシステムでは、最下位バイトが最初に格納されます。

エンドポイント

[「サービスエンドポイント」](#)を参照してください。

エンドポイントサービス

仮想プライベートクラウド (VPC) でホストして他のユーザーと共有できるサービス。を使用してエンドポイントサービスを作成し AWS PrivateLink、他の AWS アカウント または AWS Identity and Access Management (IAM) プリンシパルにアクセス許可を付与できます。これらのアカウントまたはプリンシパルは、インターフェイスエンドポイントを作成することでVPC、エンドポイントサービスにプライベートに接続できます。詳細については、Amazon Virtual Private Cloud (Amazon VPC) ドキュメントの[「エンドポイントサービスを作成する」](#)を参照してください。

エンタープライズリソースプランニング (ERP)

エンタープライズの主要なビジネスプロセス (会計、[MES](#)、プロジェクト管理など) を自動化および管理するシステム。

エンベロープ暗号化

暗号化キーを、別の暗号化キーを使用して暗号化するプロセス。詳細については、AWS Key Management Service (AWS KMS) ドキュメントの[「エンベロープ暗号化」](#)を参照してください。

環境

実行中のアプリケーションのインスタンス。クラウドコンピューティングにおける一般的な環境の種類は以下のとおりです。

- 開発環境 — アプリケーションのメンテナンスを担当するコアチームのみが利用できる、実行中のアプリケーションのインスタンス。開発環境は、上位の環境に昇格させる変更をテストするときに使用します。このタイプの環境は、テスト環境と呼ばれることもあります。
- 下位環境 — 初期ビルドやテストに使用される環境など、アプリケーションのすべての開発環境。
- 本番環境 — エンドユーザーがアクセスできる、実行中のアプリケーションのインスタンス。CI/CD パイプラインでは、本番環境が最後のデプロイ環境になります。
- 上位環境 — コア開発チーム以外のユーザーがアクセスできるすべての環境。これには、本番環境、本番前環境、ユーザー承認テスト環境などが含まれます。

エピック

アジャイル方法論で、お客様の作業の整理と優先順位付けに役立つ機能カテゴリ。エピックでは、要件と実装タスクの概要についてハイレベルな説明を提供します。例えば、AWS CAF セキュリティエピックには、アイデンティティとアクセスの管理、検出コントロール、インフラストラクチャのセキュリティ、データ保護、インシデント対応が含まれます。AWS 移行戦略のエピックの詳細については、[プログラム実装ガイド](#) を参照してください。

ERP

[「エンタープライズリソース計画」](#) を参照してください。

探索的データ分析 (EDA)

データセットを分析してその主な特性を理解するプロセス。お客様は、データを収集または集計してから、パターンの検出、異常の検出、および前提条件のチェックのための初期調査を実行します。EDA は、サマリー統計を計算し、データ視覚化を作成することで実行されます。

F

ファクトテーブル

[スタースキーマの中央テーブル](#)。ビジネスオペレーションに関する定量的なデータを保存します。通常、ファクトテーブルには 2 つのタイプの列が含まれます。つまり、メジャーを含む列と、ディメンションテーブルへの外部キーを含む列です。

フェイルファースト

開発ライフサイクルを短縮するために頻繁で段階的なテストを使用する哲学。これはアジャイルアプローチの重要な部分です。

障害分離境界

では AWS クラウド、アベイラビリティゾーン AWS リージョン、コントロールプレーン、データプレーンなどの境界が、障害の影響を制限し、ワークロードの耐障害性を向上させるのに役立ちます。詳細については、[AWS「障害分離境界」](#)を参照してください。

機能ブランチ

[ブランチ](#) を参照してください。

特徴量

お客様が予測に使用する入力データ。例えば、製造コンテキストでは、特徴量は製造ラインから定期的にキャプチャされるイメージの可能性もあります。

特徴量重要度

モデルの予測に対する特徴量の重要性。これは通常、Shapley Additive Explanations (SHAP) や統合勾配など、さまざまな手法で計算できる数値スコアとして表されます。詳細については、[「を使用した機械学習モデルの解釈可能性AWS」](#)を参照してください。

機能変換

追加のソースによるデータのエンリッチ化、値のスケーリング、単一のデータフィールドからの複数の情報セットの抽出など、機械学習プロセスのデータを最適化すること。これにより、機械学習モデルはデータの恩恵を受けることができます。例えば、「2021-05-27 00:15:37」の日付を「2021年」、「5月」、「木」、「15」に分解すると、学習アルゴリズムがさまざまなデータコンポーネントに関連する微妙に異なるパターンを学習するのに役立ちます。

FGAC

[「きめ細かなアクセスコントロール」](#)を参照してください。

きめ細かなアクセスコントロール (FGAC)

複数の条件を使用してアクセス要求を許可または拒否すること。

フラッシュカット移行

段階的なアプローチを使用する代わりに、[変更データキャプチャ](#)による継続的なデータレプリケーションを使用して、可能な限り短時間でデータを移行するデータベース移行方法。目的はダウンタイムを最小限に抑えることです。

G

ジオブロッキング

[地理的制限](#) を参照してください。

地理的制限 (ジオブロッキング)

Amazon では CloudFront、特定の国のユーザーがコンテンツディストリビューションにアクセスできないようにするオプションです。アクセスを許可する国と禁止する国は、許可リストまたは禁止リストを使って指定します。詳細については、CloudFront ドキュメントの「[コンテンツの地理的分散の制限](#)」を参照してください。

Gitflow ワークフロー

下位環境と上位環境が、ソースコードリポジトリでそれぞれ異なるブランチを使用する方法。Gitflow ワークフローはレガシーと見なされ、[トランクベースのワークフロー](#)はモダンで望ましいアプローチです。

グリーンフィールド戦略

新しい環境に既存のインフラストラクチャが存在しないこと。システムアーキテクチャにグリーンフィールド戦略を導入する場合、既存のインフラストラクチャ (別名 [ブラウンフィールド](#)) との互換性の制約を受けることなく、あらゆる新しいテクノロジーを選択できます。既存のインフラストラクチャを拡張している場合は、ブラウンフィールド戦略とグリーンフィールド戦略を融合させることもできます。

ガードレール

組織全体のリソース、ポリシー、コンプライアンスを管理するのに役立つ大まかなルール (OUs)。予防ガードレールは、コンプライアンス基準に一致するようにポリシーを実施します。これらは、サービスコントロールポリシーとIAMアクセス許可の境界を使用して実装されます。検出ガードレールは、ポリシー違反やコンプライアンス上の問題を検出し、修復のためのアラートを発信します。これらは AWS Config、AWS Security Hub、Amazon GuardDuty、AWS Trusted Advisor Amazon Inspector、およびカスタム AWS Lambda チェックを使用して実装されます。

H

HA

[高可用性](#) を参照してください。

異種混在データベースの移行

別のデータベースエンジンを使用するターゲットデータベースへお客様の出典データベースの移行 (例えば、Oracle から Amazon Aurora)。異種間移行は通常、アーキテクチャの再設計作業の一部であり、スキーマの変換は複雑なタスクになる可能性があります。[AWS は、スキーマの変換に役立つ AWS SCT を提供します。](#)

ハイアベイラビリティ (HA)

課題や災害が発生した場合に、介入なしにワークロードを継続的に運用できること。HA システムは、自動的にフェイルオーバーし、一貫して高品質のパフォーマンスを提供し、パフォーマンスへの影響を最小限に抑えながらさまざまな負荷や障害を処理するように設計されています。

ヒストリアンのモダナイゼーション

製造業のニーズによりよく応えるために、オペレーションテクノロジー (OT) システムをモダナイズし、アップグレードするためのアプローチ。ヒストリアンは、工場内のさまざまなソースからデータを収集して保存するために使用されるデータベースの一種です。

同種データベースの移行

ソースデータベースを、同じデータベースエンジンを共有するターゲットデータベースに移行する (Microsoft SQL Server から Amazon RDS for SQL Server など)。同種間移行は、通常、リホストまたはリプラットフォーム化の作業の一部です。ネイティブデータベースユーティリティを使用して、スキーマを移行できます。

ホットデータ

リアルタイムデータや最近の翻訳データなど、頻繁にアクセスされるデータ。通常、このデータには高速なクエリ応答を提供する高性能なストレージ階層またはクラスが必要です。

ホットフィックス

本番環境の重大な問題を修正するために緊急で配布されるプログラム。緊急性のため、通常、ホットフィックスは一般的な DevOps リリースワークフローの外部で行われます。

ハイパーケア期間

カットオーバー直後、移行したアプリケーションを移行チームがクラウドで管理、監視して問題に対処する期間。通常、この期間は 1~4 日です。ハイパーケア期間が終了すると、アプリケーションに対する責任は一般的に移行チームからクラウドオペレーションチームに移ります。

I

IaC

[「Infrastructure as Code」](#) を参照してください。

ID ベースのポリシー

AWS クラウド 環境内のアクセス許可を定義する 1 つ以上の IAM プリンシパルにアタッチされたポリシー。

アイドル状態のアプリケーション

90 日間の平均使用量 CPU とメモリ使用量が 5~20% のアプリケーション。移行プロジェクトでは、これらのアプリケーションを廃止するか、オンプレミスに保持するのが一般的です。

IIoT

[「産業用モノのインターネット」](#) を参照してください。

イミュータブルインフラストラクチャ

既存のインフラストラクチャを更新、パッチ適用、または変更する代わりに、本番稼働ワークロード用に新しいインフラストラクチャをデプロイするモデル。イミュータブルインフラストラクチャは、本質的に [ミュータブルインフラストラクチャ](#) よりも一貫性、信頼性、予測性に優れています。詳細については、AWS 「Well-Architected Framework」の [「イミュータブルインフラストラクチャのベストプラクティスを使用したデプロイ」](#) を参照してください。

インバウンド (インGRESS) VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、VPC がアプリケーションの外部からネットワーク接続を受け入れ、検査し、ルーティングします。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#) では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイス VPCs を保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

増分移行

アプリケーションを 1 回ですべてカットオーバーするのではなく、小さい要素に分けて移行するカットオーバー戦略。例えば、最初は少数のマイクロサービスまたはユーザーのみを新しいシステムに移行する場合があります。すべてが正常に機能することを確認できたら、残りのマイクロサービスやユーザーを段階的に移行し、レガシーシステムを廃止できるようにします。この戦略により、大規模な移行に伴うリスクが軽減されます。

インダストリー 4.0

接続、リアルタイムデータ、オートメーション、分析、AI/ML の進歩を通じて、製造プロセスのモダナイゼーションを指すために 2016 年に [Klaus Schwab](#) によって導入された用語。

インフラストラクチャ

アプリケーションの環境に含まれるすべてのリソースとアセット。

Infrastructure as Code (IaC)

アプリケーションのインフラストラクチャを一連の設定ファイルを使用してプロビジョニングし、管理するプロセス。IaC は、新しい環境を再現可能で信頼性が高く、一貫性のあるものにするため、インフラストラクチャを一元的に管理し、リソースを標準化し、スケールを迅速に行えるように設計されています。

産業用モノのインターネット (IIoT)

製造、エネルギー、自動車、ヘルスケア、ライフサイエンス、農業などの産業部門におけるインターネットに接続されたセンサーやデバイスの使用。詳細については、[「産業用モノのインターネット \(IIoT\) デジタルトランスフォーメーション戦略の構築」](#)を参照してください。

検査 VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、VPCs (同じまたは異なる 内の AWS リージョン)、インターネット、オンプレミスネットワーク間のネットワークトラフィックの検査VPCを管理する一元化されたです。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#)では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイスVPCsを保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

IoT

インターネットまたはローカル通信ネットワークを介して他のデバイスやシステムと通信する、センサーまたはプロセッサが組み込まれた接続済み物理オブジェクトのネットワーク。詳細については、[「IoT とは」](#)を参照してください。

解釈可能性

機械学習モデルの特性で、モデルの予測がその入力にどのように依存するかを人間が理解できる度合いを表します。詳細については、[「を使用した機械学習モデルの解釈可能性AWS」](#)を参照してください。

IoT

[「モノのインターネット」](#)を参照してください。

IT 情報ライブラリ (ITIL)

IT サービスを提供し、これらのサービスをビジネス要件に合わせるための一連のベストプラクティス。ITIL は、 の基盤を提供しますITSM。

IT サービス管理 (ITSM)

組織の IT サービスの設計、実装、管理、およびサポートに関連する活動。クラウドオペレーションとITSMツールの統合については、 [「オペレーション統合ガイド」](#) を参照してください。

ITIL

[「IT 情報ライブラリ」](#) を参照してください。

ITSM

[「IT サービス管理」](#) を参照してください。

L

ラベルベースのアクセスコントロール (LBAC)

ユーザーとデータ自体にそれぞれセキュリティラベル値が明示的に割り当てられている必須のアクセスコントロール (MAC) の実装。ユーザーセキュリティラベルとデータセキュリティラベルが交差する部分によって、ユーザーに表示される行と列が決まります。

ランディングゾーン

ランディングゾーンは、スケーラブルで安全な、適切に設計されたマルチアカウント AWS 環境です。これは、組織がセキュリティおよびインフラストラクチャ環境に自信を持ってワークロードとアプリケーションを迅速に起動してデプロイできる出発点です。ランディングゾーンの詳細については、 [安全でスケーラブルなマルチアカウント AWS 環境のセットアップ](#) を参照してください。

大規模な移行

300 台以上のサーバの移行。

LBAC

[「ラベルベースのアクセスコントロール」](#) を参照してください。

最小特権

タスクの実行には必要最低限の権限を付与するという、セキュリティのベストプラクティス。詳細については、IAMドキュメントの「[最小権限のアクセス許可を適用する](#)」を参照してください。

リフトアンドシフト

[7 Rs](#) を参照してください。

リトルエンディアンシステム

最下位バイトを最初に格納するシステム。[「endianness」](#) も参照してください。

下位環境

[環境](#) を参照してください。

M

機械学習 (ML)

パターン認識と学習にアルゴリズムと手法を使用する人工知能の一種。ML は、モノのインターネット (IoT) データなどの記録されたデータを分析して学習し、パターンに基づく統計モデルを生成します。詳細については、「[機械学習](#)」を参照してください。

メインブランチ

[ブランチ](#) を参照してください。

マルウェア

コンピュータのセキュリティまたはプライバシーを侵害するように設計されたソフトウェア。マルウェアは、コンピュータシステムを混乱させたり、機密情報を漏洩したり、不正アクセスを受けたりする可能性があります。マルウェアの例としては、ウイルス、ワーム、ランサムウェア、トロイの木馬、スパイウェア、キーロガーなどがあります。

マネージドサービス

AWS のサービスがインフラストラクチャレイヤー、オペレーティングシステム、プラットフォームを AWS 運用し、エンドポイントにアクセスしてデータを保存および取得します。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) と Amazon DynamoDB は、マネージドサービスの例です。これらは抽象化されたサービスとも呼ばれます。

製造実行システム (MES)

原材料を作業現場の最終製品に変換する生産プロセスを追跡、モニタリング、文書化、制御するためのソフトウェアシステム。

MAP

[「移行促進プログラム」](#)を参照してください。

メカニズム

ツールを作成し、ツールの採用を推進し、調整を行うために結果を検査する完全なプロセス。メカニズムは、動作中にそれ自体を強化して改善するサイクルです。詳細については、AWS「Well-Architected フレームワーク」の[「メカニズムの構築」](#)を参照してください。

メンバーアカウント

の組織の一部である管理アカウント AWS アカウント を除くすべての AWS Organizations。アカウントが組織のメンバーになることができるのは、一度に1つのみです。

MES

[製造実行システム](#)を参照してください。

メッセージキューイングテレメトリトランスポート (MQTT)

リソースに制約のある IoT デバイス用の、[パブリッシュ/サブスクライブ](#)パターンに基づく軽量 machine-to-machine (M2M) 通信プロトコル。

マイクロサービス

明確に定義された上で通信APIsし、通常は小規模な自給自足チームが所有する、小規模で独立したサービス。例えば、保険システムには、販売やマーケティングなどのビジネス機能、または購買、請求、分析などのサブドメインにマッピングするマイクロサービスが含まれる場合があります。マイクロサービスの利点には、俊敏性、柔軟なスケーリング、容易なデプロイ、再利用可能なコード、回復力などがあります。詳細については、[AWS「サーバーレスサービスを使用したマイクロサービスの統合」](#)を参照してください。

マイクロサービスアーキテクチャ

各アプリケーションプロセスをマイクロサービスとして実行する独立したコンポーネントを使用してアプリケーションを構築するアプローチ。これらのマイクロサービスは、軽量を使用して、明確に定義されたインターフェイスを介して通信しますAPIs。このアーキテクチャの各マイクロサービスは、アプリケーションの特定の機能に対する需要を満たすように更新、デプロイ、およ

びスケーリングできます。詳細については、[「でのマイクロサービスの実装 AWS」](#)を参照してください。

移行促進プログラム (MAP)

組織がクラウドに移行するための強力な運用基盤を構築し、移行の初期コストを相殺するのに役立つコンサルティングサポート、トレーニング、およびサービスを提供する AWS プログラム。MAP には、従来の移行を系統的な方法で実行するための移行方法論と、一般的な移行シナリオを自動化して高速化するための一連のツールが含まれています。

大規模な移行

アプリケーションポートフォリオの大部分を次々にクラウドに移行し、各ウェーブでより多くのアプリケーションを高速に移動させるプロセス。この段階では、以前の段階から学んだベストプラクティスと教訓を使用して、移行ファクトリー チーム、ツール、プロセスのうち、オートメーションとアジャイルデリバリーによってワークロードの移行を合理化します。これは、[AWS 移行戦略](#) の第 3 段階です。

移行ファクトリー

自動化された俊敏性のあるアプローチにより、ワークロードの移行を合理化する部門横断的なチーム。移行ファクトリーチームには、通常、オペレーション、ビジネスアナリストと所有者、移行エンジニア、デベロッパー、スプリントに携わる DevOps プロフェッショナルが含まれます。エンタープライズアプリケーションポートフォリオの 20~50% は、ファクトリーのアプローチによって最適化できる反復パターンで構成されています。詳細については、このコンテンツセットの[移行ファクトリーに関する解説](#)と[Cloud Migration Factory ガイド](#)を参照してください。

移行メタデータ

移行を完了するために必要なアプリケーションおよびサーバーに関する情報。移行パターンごとに、異なる一連の移行メタデータが必要です。移行メタデータの例には、ターゲットサブネット、セキュリティグループ、AWS アカウントなどがあります。

移行パターン

移行戦略、移行先、および使用する移行アプリケーションまたはサービスを詳述する、反復可能な移行タスク。例: AWS Application Migration Service EC2を使用して Amazon への移行をリホストします。

移行ポートフォリオ評価 (MPA)

に移行するためのビジネスケースを検証するための情報を提供するオンラインツール AWS クラウド。MPA は、詳細なポートフォリオ評価 (サーバーの適正サイズ、料金、TCO比較、移行コス

ト分析)と移行計画(アプリケーションデータ分析とデータ収集、アプリケーショングループ化、移行の優先順位付け、ウェーブプランニング)を提供します。[MPA ツール](#) (ログインが必要)は、すべての AWS コンサルタントと APN パートナー コンサルタントが無料で利用できます。

移行準備状況評価 (MRA)

を使用して、組織のクラウド準備状況に関するインサイトを取得し、長所と短所を特定し、特定されたギャップを埋めるためのアクションプランを構築するプロセス AWS CAF。詳細については、[移行準備状況ガイド](#) を参照してください。MRA は [AWS 移行戦略の最初のフェーズ](#) です。

移行戦略

ワークロードを に移行するために使用されるアプローチ AWS クラウド。詳細については、この用語集の「[7 Rs エントリ](#)」および「[組織を動員して大規模な移行を加速する](#)」を参照してください。

ML

[「機械学習」](#) を参照してください。

モダナイゼーション

古い(レガシーまたはモノリシック)アプリケーションとそのインフラストラクチャをクラウド内の俊敏で弾力性のある高可用性システムに変換して、コストを削減し、効率を高め、イノベーションを活用します。詳細については、「」の「[アプリケーションのモダナイズ戦略 AWS クラウド](#)」を参照してください。

モダナイゼーション準備状況評価

組織のアプリケーションのモダナイゼーションの準備状況を判断し、利点、リスク、依存関係を特定し、組織がこれらのアプリケーションの将来の状態をどの程度適切にサポートできるかを決定するのに役立つ評価。評価の結果として、ターゲットアーキテクチャのブループリント、モダナイゼーションプロセスの開発段階とマイルストーンを詳述したロードマップ、特定されたギャップに対処するためのアクションプランが得られます。詳細については、「」の「[アプリケーションのモダナイゼーション準備状況の評価 AWS クラウド](#)」を参照してください。

モノリシックアプリケーション (モノリス)

緊密に結合されたプロセスを持つ単一のサービスとして実行されるアプリケーション。モノリシックアプリケーションにはいくつかの欠点があります。1つのアプリケーション機能エクスペリエンスの需要が急増する場合は、アーキテクチャ全体をスケーリングする必要があります。モノリシックアプリケーションの特徴を追加または改善することは、コードベースが大きくなると複雑になります。これらの問題に対処するには、マイクロサービスアーキテクチャを使用できます。詳細については、[モノリスをマイクロサービスに分解する](#) を参照してください。

MPA

[「移行ポートフォリオ評価」](#)を参照してください。

MQTT

[「Message Queuing Telemetry Transport」](#)を参照してください。

多クラス分類

複数のクラスの予測を生成するプロセス (2 つ以上の結果の 1 つを予測します)。例えば、機械学習モデルが、「この製品は書籍、自動車、電話のいずれですか?」または、「このお客様にとって最も関心のある商品のカテゴリはどれですか?」と聞くかもしれません。

ミュータブルインフラストラクチャ

本稼働ワークロードの既存のインフラストラクチャを更新および変更するモデル。Well-Architected Framework AWS では、一貫性、信頼性、予測可能性を向上させるために、[イミュータブルインフラストラクチャ](#)をベストプラクティスとして使用することを推奨しています。

O

OAC

[「オリジンアクセスコントロール」](#)を参照してください。

OAI

[「オリジンアクセスアイデンティティ」](#)を参照してください。

OCM

[「組織変更管理」](#)を参照してください。

オフライン移行

移行プロセス中にソースワークロードを停止させる移行方法。この方法はダウンタイムが長くなるため、通常は重要ではない小規模なワークロードに使用されます。

OI

[「オペレーション統合」](#)を参照してください。

OLA

[「運用レベルの契約」](#)を参照してください。

オンライン移行

ソースワークロードをオフラインにせずにターゲットシステムにコピーする移行方法。ワークロードに接続されているアプリケーションは、移行中も動作し続けることができます。この方法はダウンタイムがゼロから最小限で済むため、通常は重要な本番稼働環境のワークロードに使用されます。

OPC-UA

[Open Process Communications - Unified Architecture](#) を参照してください。

Open Process Communications - 統合アーキテクチャ (OPC-UA)

産業オートメーション用の machine-to-machine (M2M) 通信プロトコル。OPC-UA は、データの暗号化、認証、認可スキームとの相互運用性標準を提供します。

運用レベルの契約 (OLA)

サービスレベルの契約をサポートするために、IT グループが相互にどのような機能を提供することを約束するかを明確にする契約 (SLA)。

運用準備状況のレビュー (ORR)

インシデントや潜在的な障害の範囲を理解、評価、防止、または軽減するのに役立つ質問とそれに関連するベストプラクティスのチェックリスト。詳細については、AWS Well-Architected フレームワークの「[Operational Readiness Reviews \(ORR\)](#)」を参照してください。

運用テクノロジー (OT)

物理環境と連携して産業オペレーション、機器、インフラストラクチャを制御するハードウェアおよびソフトウェアシステム。製造では、OT と情報技術 (IT) システムの統合が [Industry 4.0](#) 変換の主要な焦点です。

オペレーション統合 (OI)

クラウドでオペレーションをモダナイズするプロセスには、準備計画、オートメーション、統合が含まれます。詳細については、[オペレーション統合ガイド](#) を参照してください。

組織の証跡

組織 AWS アカウント 内のすべてののすべてのイベント AWS CloudTrail をログに記録するによって作成された証跡 AWS Organizations。証跡は、組織に含まれている各 AWS アカウントに作成され、各アカウントのアクティビティを追跡します。詳細については、ドキュメントの「[組織の証跡の作成](#)」を参照してください。CloudTrail

組織変更管理 (OCM)

人材、文化、リーダーシップの観点から、主要な破壊的なビジネス変革を管理するためのフレームワーク。OCM は、変化の採用を加速し、移行に伴う問題に対処し、文化的および組織的な変化を推進することで、組織が新しいシステムや戦略の準備と移行を支援します。AWS 移行戦略では、クラウド導入プロジェクトに必要な変化のスピードから、このフレームワークは人材アクセラレーションと呼ばれます。詳細については、[OCM「ガイド」](#)を参照してください。

オリジンアクセスコントロール (OAC)

では CloudFront、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) コンテンツを保護するためにアクセスを制限するための拡張オプションがあります。OAC は、すべての S3 バケット AWS リージョン、AWS KMS (SSE-KMS) によるサーバー側の暗号化、および S3 バケットへの動的 PUT および DELETE リクエストをサポートします。

オリジンアクセスアイデンティティ (OAI)

では CloudFront、Amazon S3 コンテンツを保護するためにアクセスを制限するオプションです。を使用する場合 OAI、は Amazon S3 が認証できるプリンシパル CloudFront を作成します。認証されたプリンシパルは、特定の CloudFront ディストリビューションを介してのみ S3 バケット内のコンテンツにアクセスできます。また [OAC](#)、「」も参照してください。これにより、より詳細で拡張されたアクセスコントロールが提供されます。

ORR

[「運用準備状況の確認」](#)を参照してください。

OT

[運用テクノロジー](#)を参照してください。

アウトバウンド (出力) VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、アプリケーション内から開始されたネットワーク接続VPCを処理するです。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#)では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイスVPCsを保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

P

アクセス許可の境界

ユーザーまたはロールが持つことができる最大アクセス許可を設定するためにIAMプリンシパルにアタッチされるIAM管理ポリシー。詳細については、IAMドキュメントの「[アクセス許可の境界](#)」を参照してください。

個人を特定できる情報 (PII)

直接閲覧した場合、または他の関連データと組み合わせた場合に、個人の身元を合理的に推測するために使用できる情報。例としてPIIは、名前、住所、連絡先情報などがあります。

PII

[個人を特定できる情報](#)を参照してください。

プレイブック

クラウドでのコアオペレーション機能の提供など、移行に関連する作業を取り込む、事前定義された一連のステップ。プレイブックは、スクリプト、自動ランブック、またはお客様のモダナイズされた環境を運用するために必要なプロセスや手順の要約などの形式をとることができます。

PLC

[「プログラム可能なロジックコントローラー」](#)を参照してください。

PLM

[「製品ライフサイクル管理」](#)を参照してください。

ポリシー

アクセス許可の定義 ([アイデンティティベースのポリシー](#)を参照)、アクセス条件の指定 ([リソースベースのポリシー](#)を参照)、または の組織内のすべてのアカウントに対する最大アクセス許可の定義 AWS Organizations ([サービスコントロールポリシー](#)を参照) が可能なオブジェクト。

多言語の永続性

データアクセスパターンやその他の要件に基づいて、マイクロサービスのデータストレージテクノロジーを個別に選択します。マイクロサービスが同じデータストレージテクノロジーを使用している場合、実装上の問題が発生したり、パフォーマンスが低下する可能性があります。マイクロサービスは、要件に最も適合したデータストアを使用すると、より簡単に実装でき、パフォーマンスとスケーラビリティが向上します。詳細については、[マイクロサービスでのデータ永続性の有効化](#)を参照してください。

ポートフォリオ評価

移行を計画するために、アプリケーションポートフォリオの検出、分析、優先順位付けを行うプロセス。詳細については、「[移行準備状況ガイド](#)」を参照してください。

述語

true または を返すクエリ条件。一般的には false WHERE 句にあります。

述語プッシュダウン

転送前にクエリ内のデータをフィルタリングするデータベースクエリ最適化手法。これにより、リレーショナルデータベースから取得して処理する必要があるデータの量が減少し、クエリのパフォーマンスが向上します。

予防的コントロール

イベントの発生を防ぐように設計されたセキュリティコントロール。このコントロールは、ネットワークへの不正アクセスや好ましくない変更を防ぐ最前線の防御です。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Preventative controls](#)を参照してください。

プリンシパル

アクションを実行し AWS、リソースにアクセスできる のエンティティ。このエンティティは通常、IAM ロール AWS アカウント、またはユーザーのルートユーザーです。詳細については、「IAM ドキュメント」の「ロールの用語と概念」を参照してください。 https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/id_roles.html#id_roles_terms-and-concepts

プライバシーバイデザイン

エンジニアリングプロセス全体を通してプライバシーを考慮に入れたシステムエンジニアリングのアプローチ。

プライベートホストゾーン

Amazon Route 53 が 1 つ以上の 内のドメインとそのサブドメインのDNSクエリにどのように応答するかに関する情報を保持するコンテナVPCs。詳細については、Route 53 ドキュメントの「[プライベートホストゾーンの使用](#)」を参照してください。

プロアクティブコントロール

非準拠のリソースのデプロイを防ぐように設計された [セキュリティコントロール](#)。これらのコントロールは、プロビジョニングされる前にリソースをスキャンします。リソースがコントロールに準拠していない場合、プロビジョニングされません。詳細については、AWS Control Tower ド

キュメントの「[コントロールリファレンスガイド](#)」および「[のセキュリティコントロールの実装](#)」の「[プロアクティブコントロール](#)」を参照してください。 AWS

製品ライフサイクル管理 (PLM)

設計、開発、発売から成長、成熟、減少、削除に至るまで、ライフサイクル全体にわたる製品のデータとプロセスの管理。

本番環境

[環境](#) を参照してください。

プログラマブルロジックコントローラー (PLC)

製造では、マシンをモニタリングし、製造プロセスを自動化する、信頼性が高く適応性の高いコンピュータです。

仮名化

データセット内の個人識別子をプレースホルダー値に置き換えるプロセス。仮名化は個人のプライバシー保護に役立ちます。仮名化されたデータは、依然として個人データとみなされます。

パブリッシュ/サブスクライブ (pub/sub)

マイクロサービス間の非同期通信を可能にするパターンで、スケーラビリティと応答性を向上させます。例えば、マイクロサービスベースの [MES](#)、マイクロサービスは、他のマイクロサービスがサブスクライブできるチャンネルにイベントメッセージを公開できます。システムは、パブリッシュサービスを変更せずに新しいマイクロサービスを追加できます。

Q

クエリプラン

SQL リレーショナルデータベースシステム内のデータにアクセスするために使用する手順などの一連のステップ。

クエリプランのリグレッション

データベースサービスのオプティマイザーが、データベース環境に特定の変更が加えられる前に選択されたプランよりも最適性の低いプランを選択すること。これは、統計、制限事項、環境設定、クエリパラメータのバインディングの変更、およびデータベースエンジンの更新などが原因である可能性があります。

R

RACI マトリックス

[責任、説明責任、相談、情報 \(RACI\)](#) を参照してください。

ランサムウェア

決済が完了するまでコンピュータシステムまたはデータへのアクセスをブロックするように設計された、悪意のあるソフトウェア。

RASCI マトリックス

[責任、説明責任、相談、情報 \(RACI\)](#) を参照してください。

RCAC

[行と列のアクセスコントロール](#) を参照してください。

リードレプリカ

読み取り専用で使用されるデータベースのコピー。クエリをリードレプリカにルーティングして、プライマリデータベースへの負荷を軽減できます。

再設計

[7 Rs](#) を参照してください。

復旧ポイントの目的 (RPO)

最後のデータリカバリポイントからの最大許容時間です。これにより、最後の回復時点からサービスが中断されるまでの間に許容できるデータ損失の程度が決まります。

目標復旧時間 (RTO)

サービスが中断から復旧までの最大許容遅延時間。

リファクタリング

[7 Rs](#) を参照してください。

リージョン

地理的エリア内の AWS リソースのコレクション。各 AWS リージョンは、耐障害性、安定性、耐障害性を提供するために、他のとは独立しています。詳細については、[AWS リージョン「を使用できるアカウントを指定する」](#)を参照してください。

回帰

数値を予測する機械学習手法。例えば、「この家はどれくらいの値段で売れるでしょうか?」という問題を解決するために、機械学習モデルは、線形回帰モデルを使用して、この家に関する既知の事実 (平方フィートなど) に基づいて家の販売価格を予測できます。

リホスト

[7 Rs](#) を参照してください。

リリース

デプロイプロセスで、変更を本番環境に昇格させること。

再配置

[「7 Rs」](#) を参照してください。

プラットフォーム変更

[7 Rs](#) を参照してください。

再購入

[7 Rs](#) を参照してください。

回復性

中断に抵抗または回復するアプリケーションの機能。[高可用性](#)と[ディザスタリカバリ](#)は、で障害耐性を計画する際の一般的な考慮事項です AWS クラウド。詳細については、[AWS クラウド「レジリエンス」](#)を参照してください。

リソースベースのポリシー

Amazon S3 バケット、エンドポイント、暗号化キーなどのリソースにアタッチされたポリシー。このタイプのポリシーは、アクセスが許可されているプリンシパル、サポートされているアクション、その他の満たすべき条件を指定します。

責任、説明責任、相談、情報 (RACI) マトリックス

移行活動とクラウド運用に関わるすべての関係者の役割と責任を定義したマトリックス。マトリックスの名前は、マトリックスで定義されている責任の種類、すなわち責任 (R)、説明責任 (A)、協議 (C)、情報提供 (I) に由来します。サポート (S) タイプはオプションです。サポートを含めると、行列はRASCI行列と呼ばれ、除外すると行RACI列と呼ばれます。

レスポンスコントロール

有害事象やセキュリティベースラインからの逸脱について、修復を促すように設計されたセキュリティコントロール。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Responsive controls](#)を参照してください。

保持

[7 Rs](#) を参照してください。

廃止

[7 Rs](#) を参照してください。

ローテーション

攻撃者が認証情報にアクセスすることをより困難にするために、[シークレット](#)を定期的に更新するプロセス。

行と列のアクセスコントロール (RCAC)

アクセスルールが定義されている基本的で柔軟なSQL式の使用。RCAC は、行のアクセス許可と列マスクで構成されます。

RPO

[「復旧ポイントの目的」](#)を参照してください。

RTO

[「復旧時間の目標」](#)を参照してください。

ランブック

特定のタスクを実行するために必要な手動または自動化された一連の手順。これらは通常、エラー率の高い反復操作や手順を合理化するために構築されています。

S

SAML 2.0

多くの ID プロバイダー (IdPs) が使用するオープンスタンダード。この機能を使用すると、フェデレーテッドシングルサインオン (SSO) AWS Management Console が有効になるため、ユーザーはログインしたり、AWS API組織内のすべてのユーザーIAMに対してユーザーを作成したりすることなくオペレーションを呼び出すことができます。SAML 2.0 ベースのフェデレー

シヨンの詳細については、IAMドキュメントの [「2.0 SAML ベースのフェデレーションについて」](#) を参照してください。

SCADA

[「監視コントロールとデータ取得」](#) を参照してください。

SCP

[「サービスコントロールポリシー」](#) を参照してください。

シークレット

では AWS Secrets Manager、暗号化された形式で保存するパスワードやユーザー認証情報などの機密情報または制限付き情報。シークレット値とそのメタデータで構成されます。シークレット値は、バイナリ、1つの文字列、または複数の文字列にすることができます。詳細については、[Secrets Manager ドキュメントの「Secrets Manager シークレットの内容」](#) を参照してください。

セキュリティコントロール

脅威アクターによるセキュリティ脆弱性の悪用を防止、検出、軽減するための、技術上または管理上のガードレール。セキュリティコントロールには、[予防的](#)、[検出的](#)、[応答的 ???](#)、[およびプロアクティブ](#) の4つの主なタイプがあります。

セキュリティ強化

アタックサーフェスを狭めて攻撃への耐性を高めるプロセス。このプロセスには、不要になったリソースの削除、最小特権を付与するセキュリティのベストプラクティスの実装、設定ファイル内の不要な機能の無効化、といったアクションが含まれています。

セキュリティ情報とイベント管理 (SIEM) システム

セキュリティ情報管理 (SIM) システムとセキュリティイベント管理 (SEM) システムを組み合わせたツールとサービス。SIEM システムは、サーバー、ネットワーク、デバイス、その他のソースからデータを収集、モニタリング、分析して、脅威やセキュリティ違反を検出し、アラートを生成します。

セキュリティレスポンスの自動化

セキュリティイベントに自動的に応答または修正するように設計された、事前定義されたプログラムされたアクション。これらの自動化は、セキュリティのベストプラクティスを実装するのに役立つ[検出的](#)または[応答的](#)な AWS セキュリティコントロールとして機能します。自動レスポンスアクションの例には、VPCセキュリティグループの変更、Amazon EC2インスタンスのパッチ適用、認証情報のローテーションなどがあります。

サーバー側の暗号化

送信先で、それ AWS のサービスを受信する によるデータの暗号化。

サービスコントロールポリシー (SCP)

AWS Organizationsの組織内の、すべてのアカウントのアクセス許可を一元的に管理するポリシー。SCPはガードレールを定義するか、管理者がユーザーまたはロールに委任できるアクションの制限を設定します。を許可リストまたは拒否リストSCPとして を使用して、許可または禁止されるサービスまたはアクションを指定できます。詳細については、AWS Organizations ドキュメントの「[サービスコントロールポリシー](#)」を参照してください。

サービスエンドポイント

のエンドポイントURLの AWS のサービス。ターゲットサービスにプログラムで接続するには、エンドポイントを使用します。詳細については、AWS 全般のリファレンスの「[AWS のサービス エンドポイント](#)」を参照してください。

サービスレベル契約 (SLA)

サービスのアップタイムやパフォーマンスなど、IT チームがお客様に提供すると約束したものを明示した合意書。

サービスレベルインジケータ (SLI)

エラー率、可用性、スループットなど、サービスのパフォーマンス側面の測定。

サービスレベルの目標 (SLO)

サービス[レベルインジケータ](#)によって測定される、サービスの正常性を表すターゲットメトリクス。

責任共有モデル

クラウドのセキュリティとコンプライアンス AWS について共有する責任を説明するモデル。クラウドのセキュリティ AWS はクラウドのセキュリティに責任があり、クラウドのセキュリティはユーザーの責任です。詳細については、[責任共有モデル](#)を参照してください。

SIEM

[セキュリティ情報とイベント管理システム](#) を参照してください。

単一障害点 (SPOF)

システムを混乱させる可能性のある、アプリケーションの単一の重要なコンポーネントの障害。

SLA

[「サービスレベル契約」](#)を参照してください。

SLI

[「サービスレベルインジケータ」](#)を参照してください。

SLO

[「サービスレベルの目標」](#)を参照してください。

split-and-seed モデル

モダナイゼーションプロジェクトのスケールアップと加速のためのパターン。新機能と製品リリースが定義されると、コアチームは解放されて新しい製品チームを作成します。これにより、お客様の組織の能力とサービスの拡張、デベロッパーの生産性の向上、迅速なイノベーションのサポートに役立ちます。詳細については、「」の[「アプリケーションのモダナイズに対する段階的なアプローチ AWS クラウド」](#)を参照してください。

SPOF

[単一障害点](#)を参照してください。

スタースキーマ

1つの大きなファクトテーブルを使用してトランザクションデータまたは測定データを保存し、1つ以上の小さなディメンションテーブルを使用してデータ属性を保存するデータベース組織構造。この構造は、[データウェアハウス](#)またはビジネスインテリジェンスの目的で使用するために設計されています。

strangler fig パターン

レガシーシステムが廃止されるまで、システム機能を段階的に書き換えて置き換えることにより、モノリシックシステムをモダナイズするアプローチ。このパターンは、宿主の樹木から根を成長させ、最終的にその宿主を包み込み、宿主にとって代わるイチジクのつるを例えています。そのパターンは、モノリシックシステムを書き換えるときのリスクを管理する方法として[Martin Fowler](#)により提唱されました。このパターンを適用する方法の例については、「[従来の Microsoft のモダナイズ](#)」を参照してください。ASP.NET (ASMX) コンテナと Amazon API Gateway を使用してウェブサービスを段階的に更新する「」を参照してください。

サブネット

内の IP アドレスの範囲VPC。サブネットは、1つのアベイラビリティゾーンに存在する必要があります。

監視コントロールとデータ取得 (SCADA)

製造では、ハードウェアとソフトウェアを使用して物理アセットと本番稼働をモニタリングするシステムです。

対称暗号化

データの暗号化と復号に同じキーを使用する暗号化のアルゴリズム。

合成テスト

ユーザーインタラクションをシミュレートして潜在的な問題を検出したり、パフォーマンスをモニタリングしたりする方法でシステムをテストします。[Amazon CloudWatch Synthetics](#) を使用して、これらのテストを作成できます。

T

タグ

AWS リソースを整理するためのメタデータとして機能するキーと値のペア。タグは、リソースの管理、識別、整理、検索、フィルタリングに役立ちます。詳細については、「[AWS リソースのタグ付け](#)」を参照してください。

ターゲット変数

監督された機械学習でお客様が予測しようとしている値。これは、結果変数のことも指します。例えば、製造設定では、ターゲット変数が製品の欠陥である可能性があります。

タスクリスト

ランブックの進行状況を追跡するために使用されるツール。タスクリストには、ランブックの概要と完了する必要がある一般的なタスクのリストが含まれています。各一般的なタスクには、推定所要時間、所有者、進捗状況が含まれています。

テスト環境

[環境](#) を参照してください。

トレーニング

お客様の機械学習モデルに学習するデータを提供すること。トレーニングデータには正しい答えが含まれている必要があります。学習アルゴリズムは入力データ属性をターゲット (お客様が予測したい答え) にマッピングするトレーニングデータのパターンを検出します。これらのパター

ンをキャプチャする機械学習モデルを出力します。そして、お客様が機械学習モデルを使用して、ターゲットがわからない新しいデータでターゲットを予測できます。

トランジットゲートウェイ

VPCs とオンプレミスのネットワークを相互接続するために使用できるネットワークトランジットハブ。詳細については、AWS Transit Gateway ドキュメントの「[トランジットゲートウェイとは](#)」を参照してください。

トランクベースのワークフロー

デベロッパーが機能ブランチで機能をローカルにビルドしてテストし、その変更をメインブランチにマージするアプローチ。メインブランチはその後、開発環境、本番前環境、本番環境に合わせて順次構築されます。

信頼されたアクセス

組織内でタスクを実行するために指定したサービスに、ユーザーに代わって AWS Organizations および アカウントでアクセス許可を付与します。信頼されたサービスは、サービスにリンクされたロールを必要とときに各アカウントに作成し、ユーザーに代わって管理タスクを実行します。詳細については、ドキュメントの「[を他の AWS のサービス AWS Organizations で使用する AWS Organizations](#)」を参照してください。

チューニング

機械学習モデルの精度を向上させるために、お客様のトレーニングプロセスの側面を変更する。例えば、お客様が機械学習モデルをトレーニングするには、ラベル付けセットを生成し、ラベルを追加します。これらのステップを、異なる設定で複数回繰り返して、モデルを最適化します。

ツーピザチーム

2 つのピザを食べることができる小さな DevOps チーム。ツーピザチームの規模では、ソフトウェア開発におけるコラボレーションに最適な機会が確保されます。

U

不確実性

予測機械学習モデルの信頼性を損なう可能性がある、不正確、不完全、または未知の情報を指す概念。不確実性には、次の 2 つのタイプがあります。認識論的不確実性は、限られた、不完全なデータによって引き起こされ、弁論的不確実性は、データに固有のノイズとランダム性によって引き起こされます。詳細については、[深層学習システムにおける不確実性の定量化](#) ガイドを参照してください。

未分化なタスク

ヘビーリフティングとも呼ばれ、アプリケーションの作成と運用には必要だが、エンドユーザーに直接的な価値をもたらさなかったり、競争上の優位性をもたらしたりしない作業です。未分化なタスクの例としては、調達、メンテナンス、キャパシティプランニングなどがあります。

上位環境

[環境](#) を参照してください。

V

バキューミング

ストレージを再利用してパフォーマンスを向上させるために、増分更新後にクリーンアップを行うデータベースのメンテナンス操作。

バージョンコントロール

リポジトリ内のソースコードへの変更など、変更を追跡するプロセスとツール。

VPC ピアリング

プライベート IP アドレスを使用してトラフィックをルーティングVPCsできる 2 つの間の接続。詳細については、Amazon VPCドキュメントの[VPC「ピアリングとは」](#)を参照してください。

脆弱性

システムのセキュリティを脅かすソフトウェアまたはハードウェアの欠陥。

W

ウォームキャッシュ

頻繁にアクセスされる最新の関連データを含むバッファキャッシュ。データベースインスタンスはバッファキャッシュから、メインメモリまたはディスクからよりも短い時間で読み取りを行うことができます。

ウォームデータ

アクセス頻度の低いデータ。この種類のデータをクエリする場合、通常は適度に遅いクエリでも問題ありません。

ウィンドウ関数

現在のレコードに何らかの形で関連する行のグループに対して計算を実行するSQL関数。ウィンドウ関数は、移動平均の計算や、現在の行の相対位置に基づく行の値へのアクセスなどのタスクの処理に役立ちます。

ワークロード

ビジネス価値をもたらすリソースとコード (顧客向けアプリケーションやバックエンドプロセスなど) の総称。

ワークストリーム

特定のタスクセットを担当する移行プロジェクト内の機能グループ。各ワークストリームは独立していますが、プロジェクト内の他のワークストリームをサポートしています。たとえば、ポートフォリオワークストリームは、アプリケーションの優先順位付け、ウェブ計画、および移行メタデータの収集を担当します。ポートフォリオワークストリームは、これらの設備を移行ワークストリームで実現し、サーバーとアプリケーションを移行します。

WORM

「書き込み」を1回参照し、多くのを読み取ります。

WQF

AWS 「ワークロード認定フレームワーク」を参照してください。

1回書き込み、多数読み込む (WORM)

データを1回書き込み、データの削除や変更を防ぐストレージモデル。認定ユーザーは、必要な回数だけデータを読み取ることができますが、変更することはできません。このデータストレージインフラストラクチャは イミュータブル と見なされます。

Z

ゼロデイ 익스プロイト

ゼロデイ脆弱性 を利用する攻撃、通常はマルウェア。

ゼロデイ脆弱性

実稼働システムにおける未解決の欠陥または脆弱性。脅威アクターは、このような脆弱性を利用してシステムを攻撃する可能性があります。開発者は、よく攻撃の結果で脆弱性に気付きます。

ゾンビアプリケーション

平均使用量CPUとメモリ使用量が 5% 未満のアプリケーション。移行プロジェクトでは、これらのアプリケーションを廃止するのが一般的です。

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。